

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報

34

平成30(2018)年度事業報告

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

令和2(2020)年3月

序

本年次報告『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』34は、平成30（2018）年度事業報告であり、発掘調査2件、試掘調査1件、立会調査16件、ボーリング立会1件、地中レーダー探査1件のほか、体験発掘などの事業の概要が掲載されています。

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な埋蔵文化財が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの発掘調査によって、次第に明らかにされています。平成30年度もまた郡元キャンパスの調査区で、古墳時代の住居跡が検出されました。南九州地域でも最大規模となる古墳時代の集落を擁した鹿大構内遺跡（郡元キャンパス）の集落域の規模がさらに拡大しました。なお、過去の調査成果については、これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol.1～33、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第1～15集として逐次報告されています。

現在もキャンパス内では、多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立って必要な埋蔵文化財調査が行われています。文化財保護法を遵守しつつ、学内施設整備が円滑に進むよう、埋蔵文化財調査センターは全力を尽くしております。そのほかにも、大学キャンパス内から出土する貴重な大学の財産、県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解、ご支援をお願い申し上げます。

令和2（2020）年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

中村 直子

例言

1. 本報告は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが平成 30（2018）年度に行なった事業の年次報告である。したがって、内容についての施設名称や職制などは当時のものである。
2. 本書に掲載している発掘・試掘調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが担当した。立会調査は、鹿児島市教育委員会が担当し、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターがこれを補助した。
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査センター職員が行なった。担当者は以下のとおりである。

製図（新里貴之・中村直子・相良暁子・吉村ゆう子・瀧田綾子）
作表（新里） 執筆（新里）

編集（新里・中村）

4. 「Ⅱ 発掘調査の概要」については、2018（平成 30）年度に提出された概要報告書（寒川朋枝作成）を掲載した。掲載にあたって若干の改編を行っている。
5. 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査センターの管理のもと、各学部、部局が収蔵している（平成 16/2004 年 施設マネジメント委員会による）。また、図面・写真・デジタルデータなどの資料は、埋蔵文化財調査センターにおいて保管・管理されている。

凡例

- 1 昭和 60（1985）年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室（当時）設置を機として，鹿児島大学キャンパス内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように，鹿児島大学キャンパス内座標を鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）と脇田亀ヶ原遺跡（桜ヶ丘団地；旧宇宿団地）とに設定した。その設定については以下のとおりである。
 - （1）郡元団地では，国土座標第 2 座標系（ $X=-158.200$ ， $Y=-42.400$ ）を基点として，一辺 50m の方形地区割りを行なった（Fig.2 参照）。
 - （2）桜ヶ丘団地では，国土座標第 2 座標系（ $X=-161.600$ ， $Y=-44.400$ ）を基点として，一辺 50m の方形地区割りを行なった（Fig.3 参照）。
- 2 本年報におけるレベル高は，すべて海拔を表し，方位は真北方向を示す。
- 3 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。この色調に当てはまらないものについては「～に類似」，あるいは一般的な色調で表記した。
- 4 図・写真・表は，通し番号を付す。

目次

序	
例言	i
凡例	ii
鹿兒島大学埋蔵文化財調査委員会規則	1
鹿兒島大学埋蔵文化財調査センター規則	2
I 平成 30 (2018) 年度の事業概要	4
II 発掘調査の概要	
2018-1 郡元団地 I・J-3・4 区 稲盛記念会館 (仮称) 新営工事に伴う発掘調査	8
III 試掘調査	
2018 -3 桜ヶ丘団地 E-7・8 区桜ヶ丘旧病棟試掘調査	17
IV 立会調査 (2018-A ~ Q)	19
V ボーリング立会・地中レーダー探査	37
VI 整理	41
VII 刊行	41
VIII 保管	41
IX その他	41
1 遺跡見学	
2 体験発掘	
3 遺物貸出	
4 リーフレット	
5 ホームページ	
6 センター紹介・新聞記事	

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

平成 16 年 4 月 1 日
規則第 32 号

(趣旨)

第 1 条 この規則は、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則(平成 16 年規則第 103 号)第 8 条の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という。)に関し、必要な事項を定める。

(組織)

第 2 条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長(以下「センター長」という。)
- (2) 各学部、大学院理工学研究科及び大学院医歯学総合研究科の教授、准教授又は講師のうちから選出された者各 1 名

2 前項第 2 号の委員の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 埋蔵文化財調査センターの予算に関すること。
- (3) その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第 4 条 委員会に委員長を置き、第 2 条第 1 項第 1 号の委員をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第 5 条 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第 6 条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第 7 条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第 8 条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規則は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規則は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

- 1 この規則は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規則の施行前に委員となった助教授は、その任期の満了の日まで引き続き委員とする。

附 則

この規則は、平成 19 年 11 月 28 日から施行し、平成 19 年 4 月 1 日から適用する。

附 則

この規則は、平成 20 年 1 月 1 日から施行する。

附 則

この規則は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規則は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則

規則第 103 号

(趣旨)

第 1 条 この規則は、鹿児島大学学則(平成 16 年規則第 86 号)第 7 条第 2 項の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター(以下「センター」という。)に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第 2 条 センターは、鹿児島大学(以下「本学」という。)の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い、本学内に存在する埋蔵文化財の保護対策を講ずることを目的とする。

(業務)

第 3 条 センターは、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

(職員)

第 4 条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 主任
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第 5 条 センター長は、本学の考古学に関連する教員のうちから国立大学法人鹿児島大学学内共同教育研究施設等人事委員会(以下「委員会」という。)の意見を参考にして、学長が選考する。

- 2 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 3 センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長に欠員を生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。

(主任等)

第 6 条 主任は、センターの職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し、学長が選考する。

- 2 主任は、センター長の命を受けてセンターの業務を処理する。
- 3 職員は、センターの業務に従事する。

(事務)

第 7 条 センターに関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第 8 条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規則の施行後、最初の室長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

附 則

この規則は、平成 22 年 1 月 29 日から施行する。

附 則

この規則は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（平成 30 年 4 月 1 日現在）

委員長 中村直子（埋蔵文化財調査センター センター長）

委員 石田智子（法文学部）

海江田修誠（教育学部）

笠井聖仙（理工学研究科・理学系）

吉田秀樹（理工学研究科・工学系）

田松裕一（医歯学総合研究科）

大渡昭彦（医学部）

嶺崎良人（歯学部）

三好和睦（農学部）

安藤匡子（共同獣医学部）

進藤 穰（水産学部）

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター（平成 30 年 4 月 1 日現在）

センター長 教授 中村直子

教員 助教 新里貴之

特任助教 寒川朋枝

技術補佐員 篠原美智子

相良暁子

吉村ゆう子

I 平成30(2018)年度の事業概要

平成30(2018)年度は、発掘調査2件、試掘調査1件、立会調査16件を実施した。またボーリング立会と地中レーダー探査を各1件実施している(Tab.1)。遺物整理作業は4件、刊行物として発掘調査報告書第14・15集、年報33を刊行した。そのほか、遺物保管作業2件、遺跡見学の対応を1件、体験発掘1件、遺物貸出1件、リーフレット(第3版)作成1件などを実施した。

また、鹿児島大学構内遺跡や教員の研究が他機関によって紹介された事例も掲載する。

Tab.1 平成30(2018)年度事業一覧

事業	コード名	調査区	工事名称	担当者	期間	
発掘	2018-1	郡元 I・J-3・4	稲盛記念館(仮称)新営工事に伴う発掘調査(718㎡)	寒川・中村・新里	2018年4月26日～9月28日	
	2018-2	郡元 R～T-7～9	附属中学校等コンクリートブロック塀改修工事(18.2㎡)	寒川	2019年2月12日～22日	
試掘	2018-3	桜ヶ丘 E-7・8	桜ヶ丘旧病棟試掘調査	新里	2019年2月6日、3月18日	
事業	コード名	調査区	工事名称	担当者	期間	
立会	2018-A	郡元 K・L-10	海洋土木工学科棟改修工事	市教委 吉留	センター 中村・新里・寒川	2018年5月17・18・21・24日
	2018-B	郡元 G・H-3	東門周辺駐輪場取付工事	新保	中村	2018年7月11日
	2018-C	郡元 C・D-3・4	保育施設新営機械設備工事・電気設備工事	有川	中村	2018年4月16日
	2018-D	郡元 K・L-10・11	海洋土木工学科棟改修機械設備工事	新保・吉留	中村	2018年4月13・23・27日、5月11日
	2018-E	郡元 H-7	中央食堂等トイレ改修機械設備工事	有川	中村	2018年8月21日
	2018-F	郡元 I-11・12	機械工学科2号棟改修電気設備・機械設備工事	新保	新里・寒川	2019年2月7・8日
	2018-G	桜ヶ丘 C-6, L・M-7・8	構内駐輪場案内サイン設置	新保	中村	2018年7月23日
	2018-H	郡元 H-3	東門周辺駐輪場等改修電気設備工事	有川	中村	2018年8月6日
	2018-I	郡元 I-12	機械工学科2号棟改修工事	新保	新里	2019年2月7日
	2018-J	郡元 L-10	ごみ置き場設置に係わる基礎工事	新保	中村	2018年7月5日
	2018-K	郡元 N-6, O-3	サイン設置その他工事	有川	中村	2018年9月10・11日
	2018-L	郡元 L-9	共用棟給水設備改修工事	吉留	中村	2018年9月18日
	2018-N	郡元 K-3, P-4・5	法文学部第1動物実験舎南側駐車場等整備工事	新保	中村・新里	2019年1月16日、2月21日
	2018-O	郡元 S・T-8・9	附属中学校等コンクリートブロック塀改修工事	新保	中村	2019年1月24日
	2018-P	郡元 J-4・5	稲盛記念館(仮称)工事	新保	中村	2019年2月1日
	2018-Q	郡元 G-10, K-7	道路標識等設置工事	新保	中村	2019年3月19・20日
ボーリング立会		唐湊遺跡	学生寄宿舎	新里・中村	2018年6月11～14・18日、9月13日	
地中レーダー探査		郡元 I・J-3・4	稲盛記念館(仮称)建設予定地	全センター職員	2018年4月4・24日	
		郡元 J・K-6	北辰通り(東京国立博物館阿児雄之氏招聘)	中村・寒川	2018年12月14・15日	
事業	コード名	内容	担当者	期間		
整理	1976-1	郡元 理学部2号館増築予定地(釘田第8地点)発掘調査:実測・トレース	篠原・相良・吉村	2018年度		
	2017-B～J	郡元・桜ヶ丘 立会遺物:洗浄・注記・実測・トレース	篠原・相良・吉村	2018年度		
	1996-1	郡元 防火水槽取設工事遺物:実測・トレース	篠原・相良・吉村	2018年度		
	1976-1	桜ヶ丘 理学部2号館増築予定地(釘田第8地点)発掘調査(国立歴史民俗博物館貸出)復元・写真	中村・新里・相良・吉村	2018年8月4・9・10日		
事業	内容	担当者	発行			
刊行	報告書	鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第14集(理工系総合研究棟)	中村・寒川	2019年3月		
	報告書	鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第15集(釘田第8地点[2])	新里・寒川	2019年3月		
	年報	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 33	中村	2019年3月		
事業	内容	担当者	期間			
保管	遺物収蔵状況確認	14か所	新里	2018年9月28日		
	木製品保管水槽の水換え	3か所	中村	2018年10月3～11日		
事業	内容	担当者	期間			
遺跡見学	2018-1稲盛記念館(仮称)新営工事に伴う発掘調査	寒川	2018年5月17日、7月10～13・18～20日、8月3・7・10・30日			
体験発掘	2018-1稲盛記念館(仮称)新営工事に伴う発掘調査	中村・新里	2018年8月24日			
遺物貸出	国立歴史民俗博物館(理学部2号館増築予定地(釘田第8地点)発掘調査)遺物7点	中村	2018年7月30日～2019年3月31日			
リーフレット	埋蔵文化財調査センターリーフレット(第3版)	新里	2018年9月20日			
ホームページ	随時更新	中村・寒川	2018年度			
センター紹介	広島大学総合博物館第13回企画展「大学と埋蔵文化財:キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力」における鹿児島埋蔵文化財調査センター紹介・研究者紹介	新里・中村・寒川	2018年11月7日～12月15日			
	宮崎県立西都原考古博物館パネル展「地下を探る:日本のGPRはどこまで到達したのか」における鹿児島埋蔵文化財調査センターの取組み紹介	中村	2019年1月12日～3月17日			
新聞記事	「古墳時代の堅穴住居群出土」『南日本新聞』地域総合版	寒川	2018年7月30日			



Fig.1 鹿児島大学構内遺跡(郡元団地)と脇田亀ヶ原遺跡(桜ヶ丘団地)(1/25000)
国土地理院鹿児島南部 1:25000(平成16年発行を改編)



Fig.3 脇田亀ヶ原遺跡桜ヶ丘団地 (1/4000)

II 発掘調査の概要

ここでは、平成30(2018)年度に行なわれた発掘調査2件のうち、1件の概要報告を掲載する。鹿児島県教育委員会に提出したものに一部加筆・修正を行ない、編集し直している。もう1件は令和元年度の発掘調査報告書第16集掲載予定である。

2018-1 郡元団地I・J-3・4区 稲盛記念館(仮称)新営工事に伴う発掘調査

1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内において稲盛記念館(仮称)の新営工事が予定された。工事地点は、鹿児島大学構内遺跡郡元団地中央部東側に位置し、東側は高麗本通りに面している。周辺の過去の調査では縄文時代中期～近世にいたる複数の包含層が確認されているが、なかでも本工事地点周辺では古墳時代の住居跡群が密集して検出されている地点である。具体的には、本調査区北側の2012-1学習プラザ建設に伴う発掘調査(I・J-4・5区)においては、調査区北西部では河川跡と川岸付近での盛土遺構、古墳時代の水田跡、調査区南東部では重複する住居跡群が検出されている。また、南側の1999-1総合研究棟建設に伴う発掘調査(J・K-4区)、西側の2000-1共同溝埋設工事に伴う発掘調査(I・J-4区)においても、古墳時代住居跡群が検出されており、本工事地点は当該期の集落の中心部であると推定された。これらのことから、工事に先立ち埋蔵文化財の調査を行うこととなった。

2 調査体制

所在地	鹿児島市郡元1丁目21-24
調査起因	稲盛記念館(仮称)建設
発注者	稲盛和夫
代理者	株式会社 櫻井潔建築設計事務所 ETHNOS 櫻井 潔
受託者	国際文化財株式会社
監督	鹿児島大学施設部
調査担当	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 特任助教 寒川朋枝 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 教授 中村直子 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 助教 新里貴之
調査員	国際文化財株式会社 長尾聡子・高橋宏樹
現場代理人	国際文化財株式会社 木村 満
測量士	国際文化財株式会社 青山宗晴
作業員	33名
発掘期間	平成30年4月26日～11月29日
調査面積	約718㎡
遺跡の現状	緑地

3 調査経過

平成30年4月26日～5月11日 重機による表土剥ぎ, 人力清掃(5月9日より), 3層上面遺構検出
 平成30年5月14日～16日 3層上面検出遺構完掘(15日), 3層掘削
 平成30年5月17日～30日 4層上面遺構完掘(17日), 4層掘削
 平成30年5月31日～6月14日 5a層上面検出(31日), 5a層掘削
 平成30年5月15日～8月29日 5b層上面検出(15日), 5b層掘削, 遺構検出・掘削作業
 平成30年8月30日～9月7日 5c層掘削, トレンチ4ヶ所設定して6層深掘り
 平成30年9月10日～9月14日 土層観察, 土壌サンプリング

平成 30 年 9 月 17 日～20 日 遺物収納，道具片付け作業

調査区の設定は，世界測地系に基づく座標を基準とし，北西隅の交点 (X=-158.425 m, Y=-43.090 m) を起点として調査区内に 5m メッシュを設定し，調査区西北隅から東に A～F 区，北から南に 1～7 区を設定した。主な文化層は近代・近世 (3 層上面)，古代～中世 (4 層)，弥生～古墳時代 (5 層)，縄文 (6 層上面) であり，多数の遺構が検出された 5 層の調査に最も期間を要した。

調査は，重機による表土掘削ののち，人力により攪乱層を除去し，遺構検出・掘削を行った。部分的に攪乱を受けている箇所もあったため，土壌の状況を確認しながら安全確保のため小段を設定して掘り下げた。

表土掘削後，人力により攪乱を除去して掘り下げ，3 層上面ではコンター測量と遺構の検出を行い，数条の畝間跡や溝を検出した。3 層検出遺構掘削・測量後，3 層を掘り下げ 4a 層上面にてコンター測量を行った。4 層は，4a・4b・4c・4d 層と上面を検出し，完掘全景を撮影しながら人力により掘り下げた。4d 層上面ではコンター測量を行った。遺構は，足跡遺構を検出しており，水田層であったと考えられる。

5 層の調査は，5a 層上面，5b 層上面，5c 層内住居跡検出状況，完掘状況などの全景撮影をその都度行いながら掘削を行った。5a 層上面では，調査区西側中央部を中心に同心円状に硬くしまった土器集積遺構を検出した。5b 層を掘り下げていくに従い，重複する隅丸方形の竪穴住居跡プランやピット群が検出された。各住居跡の検出状況，埋土堆積状況，完掘状況を測量し写真撮影を行いながら掘り下げた。住居内埋土は，床面付近を 0.5～1m の区画に細分し，床面・炉跡炭化物集中域を中心にウォーターフローテーション用のサンプリングを行い，台帳を作成した。

そして 5 層を人力掘削後，砂層を主体とする 6 層上面において遺構検出を行い，ピット群を検出した。全景撮影・コンター測量後，10～20cm 掘削して遺構・遺物出土の確認を行った。さらに，4ヶ所に 5×5m のトレンチを設定して下層確認のため 1m 超の掘削を行い，包含層が終了したことを確認した。掘削終了完掘全景撮影・壁面土層写真撮影を行った後，土壌サンプル採取し調査を終了した。

4 基本層位 (PL.1・2)

本調査区は，攪乱層を除き大きく 5 層に分けられる。2～4 層はさらに各 2 層に大きく分層されるが地点により分層の様相は異なる。特に 4 層は，上方より浸透する鉄分やマンガンを切るように上層が堆積しており，水田などの造成により喪失している土層が部分的に認められる。また，調査区北側は南側に比べて，相対的に粗砂の混じりが多い。これは，本調査区の北側 (2012-1) に認められた河川の氾濫による影響を受けている可能性がある。各土層の境目に粗砂溜まりが認められることがある。

5 層は，層厚約 50cm ほどで，遺構・遺物量が最も多い包含層であり，大きく 3 層に分けられる。5 層上面には土器小片が硬くしまるように平たく堆積しており，2012-1 学習プラザ建設に伴う発掘調査で検出された土器溜まりの周縁部にあたると思われる。2012-1 調査時において，土器溜まり遺構より出土する須恵器から古代の時期に該当すると思われる。また，5b 層上面より徐々に住居跡が検出される。5b-3 層は攪拌されたような土壌の混ざり具合で，5c 層上面も凹凸がみられる。そして斬移層と思われる 5d 層をはさみ 6 層砂層が認められるが，本調査区北側 2012-1 学習プラザ建設に伴う発掘調査では 6 層砂層上面より縄文時代中期の土器片が出土している。以下に基本層序を示す。

1 層：表土・攪乱

2a 層：灰褐色 10YR5/1 細砂層 白色小パミス混 (地点により砂層が 2b 層との間に入る)

2b 層：にぶい黄褐色 10YR5/3 細砂層 白色小パミス混 上方に鉄分浸透

3a 層：橙色 7.5YR6/6 細砂層 白色小パミス・鉄分混，地表下約 60cm，層厚 10～25cm，上面で畝跡・溝状遺構

3b 層：にぶい褐色 7.5YR5/4 細砂層 白色小パミス混

4a 層：にぶい褐色 7.5YR5/2 粗砂混細砂層 白色パミス混，7.5YR5/6 明褐色鉄分浸透

(4 層厚 20～25cm，E 区付近より東側は粗砂混入がなくなり，シルト層細砂混土層に)

4a' 層：にぶい褐色 7.5YR5/2 粗砂混細砂層 白色パミス混 (だが 4a 層より少ない)，4a 層との境に鉄



PL.1 調査区西壁



PL.2 調査区西壁中央部下層確認トレンチ

分・マンガン

- 4b層：灰褐色 7.5YR5/2 細砂層 白色パミス少量混，7.5YR4/3 褐色鉄分上方に分布（南壁では上面に凹凸有り）
- 4b'層：灰褐色 7.5YR4/2 細砂層 白色パミス混，上方からマンガン浸透（調査区南西側分布）
- 5a層：褐色 7.5YR4/3 シルト層 上層に土器小片が硬く堆積し，鉄分も浸透している。調査区西側に主に分布し，東壁には認められない。土器小片の上に薄く数cmの堆積層（やや鉄分の浸透が少ない）が西壁で部分的に認められる地点がある
- 5b-1層：褐色 7.5YR4/3 シルト層 白色パミス少量混（北・東・南壁に分布）上位の住居検出面
- 5b-1'層：5b-1層下部に鉄分を多く含む，北壁に部分的に分布
- 5b-2層：灰褐色 7.5YR4/2 シルト層 白色パミス少量混（北・東・南壁に分布）
- 5b-3層：明褐灰色 7.5YR7/2，灰黄褐色 10YR4/2 細砂混シルト層と5c上層がマーブル状に混ざる 水田層か（調査区北東部に分布）
- 5b-3'層：5b-1層下部，灰黄褐色 10YR4/2 細砂混シルト層（北壁に部分的に分布）
- 5c-1層：黒褐色 10YR3/2 シルト（調査区北東部に分布）
- 5c-2層：にぶい黄橙色 10YR6/3 粘質シルト層（調査区北東部に分布）
- 5c-3層：黒褐色 10YR3/1 シルト 下方白色パミス混
- 5c-4層：灰黄褐色 10YR4/2 シルト細砂層混 下方パミス混 6層斬移層
- 6層：黄褐色 10YR5/6 細砂～粗砂層 軽石・白色パミス多数含む

5 遺構 (Fig.4, PL.3～9)

本調査区の主な検出遺構について，以下に述べる。

3層上面では，近世・近代と思われる浅い区画溝，畝間跡が検出された。検出された区画溝は方形約15m幅で東に約20度傾斜しており，畝跡も同じ方向に検出されている。高等農林時代の区画は南北方向に形成されているため，それ以前の区画と考えられる。

4層は水田層と思われる土層であり，4a層・4c層・4d層上面で検出・完掘全景撮影を行った。4a層上面では，部分的に足跡（E4区周辺，F6区周辺）かと思われる攪拌された面の広がりか認められた。また，4c層上面では，調査区北西隅（A-1～3区）とD・E-2区周辺に4b層の残存する浅い落ち込みラインが認められ，区画は明瞭ではないが浅く凹んだ水田面である可能性がある。出土遺物は少数で，陶磁器のほか砥石片など出土する。

5層の調査は，5a層上面において調査区西側中央部付近を中心に同心円状に土器小片密集遺構を検出した。5b～5c層にかけて，竪穴住居跡36基，掘立柱建物跡2棟，土坑・ピット群を検出した。竪穴住居内出土遺物より，東原式～笹貫式期に造営されたと思われるが，笹貫式が主体を占める。形状は殆どが隅丸方形で，多くは中心部に土器埋設炉設置（の痕跡）が認められる。また，床面に白砂を敷くもの（SK47・221・311など）もいくつか見られ，床面に高坏の坏部や埴など形状の分かる個体が逆さまの状態に残されているものもあり，住居廃絶時の様相をうかがわせる。また，一度構築した竪穴を拡張する形で，同じ場所に住居を再構築している例も認められる。調査区北西隅SK87は東・北壁を1mほど拡張しており（SK47），SK302はSK221の貼床下で入れ子状に検出されており，SK302を拡張する際にSK221の貼床土として使用されていると考えられる。そして，住居跡が調査区北西部に重複して分布する一方，E-3・4区からD・E-6区にかけては，北東方向に帯状に空白地帯となっており，集落構成の際に土地利用が意識されていた可能性が読み取れる。

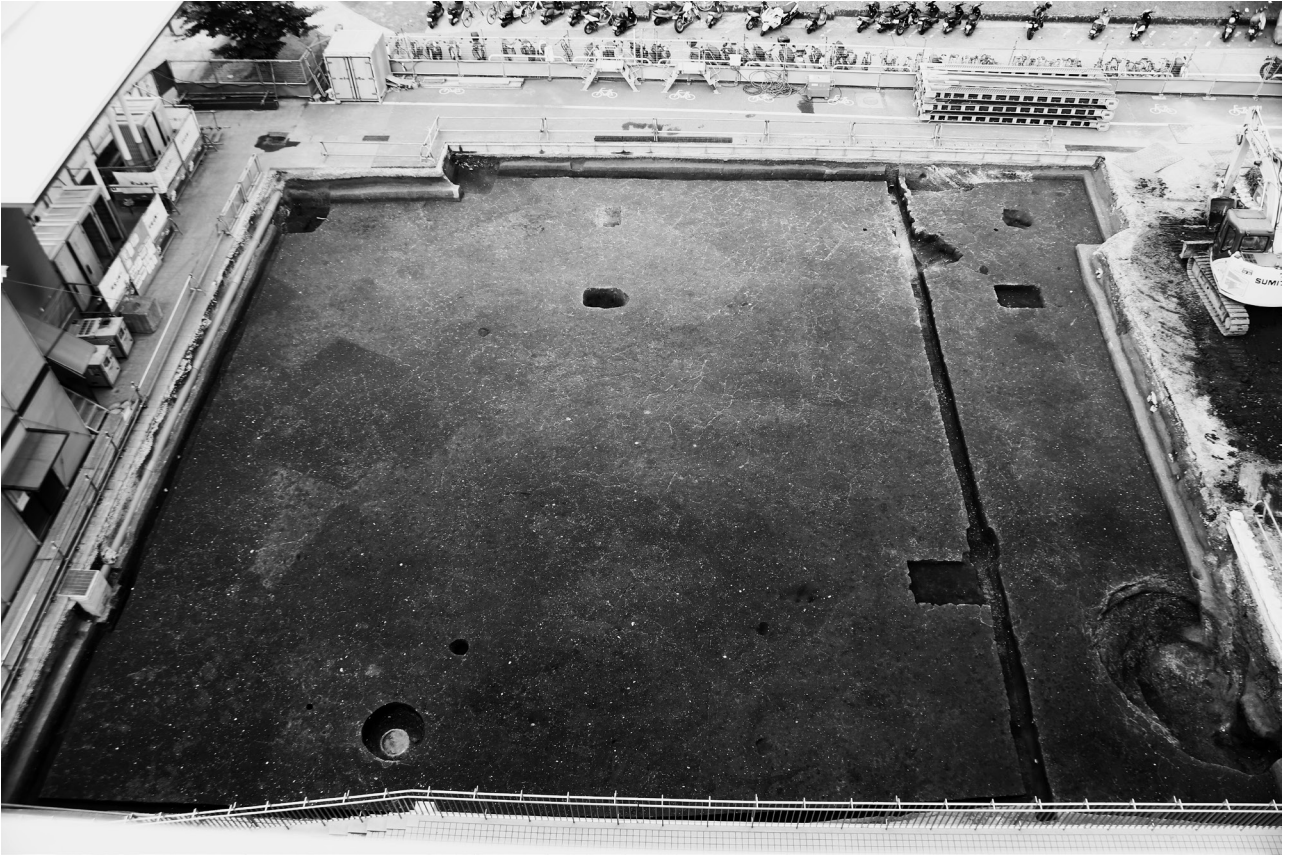
6層上面では，5層土を埋土とする複数のピット，6層中では一部被熱した小規模な集石1基を検出している。周辺の調査区では，6層砂層上面で縄文時代中期土器，竜ヶ水産黒曜石片などが出土しており，今回の調査では攪乱より1点打製石鏃が出土しているものの，包含層からの遺物出土はみられなかったため，遺構の詳細な時期は不明である。

II 発掘調査の概要



Fig.4 5b・5c層検出遺構

II 発掘調査の概要



PL.3 5層上面検出遺構（西より）



PL.4 5b層中検出遺構（西より）



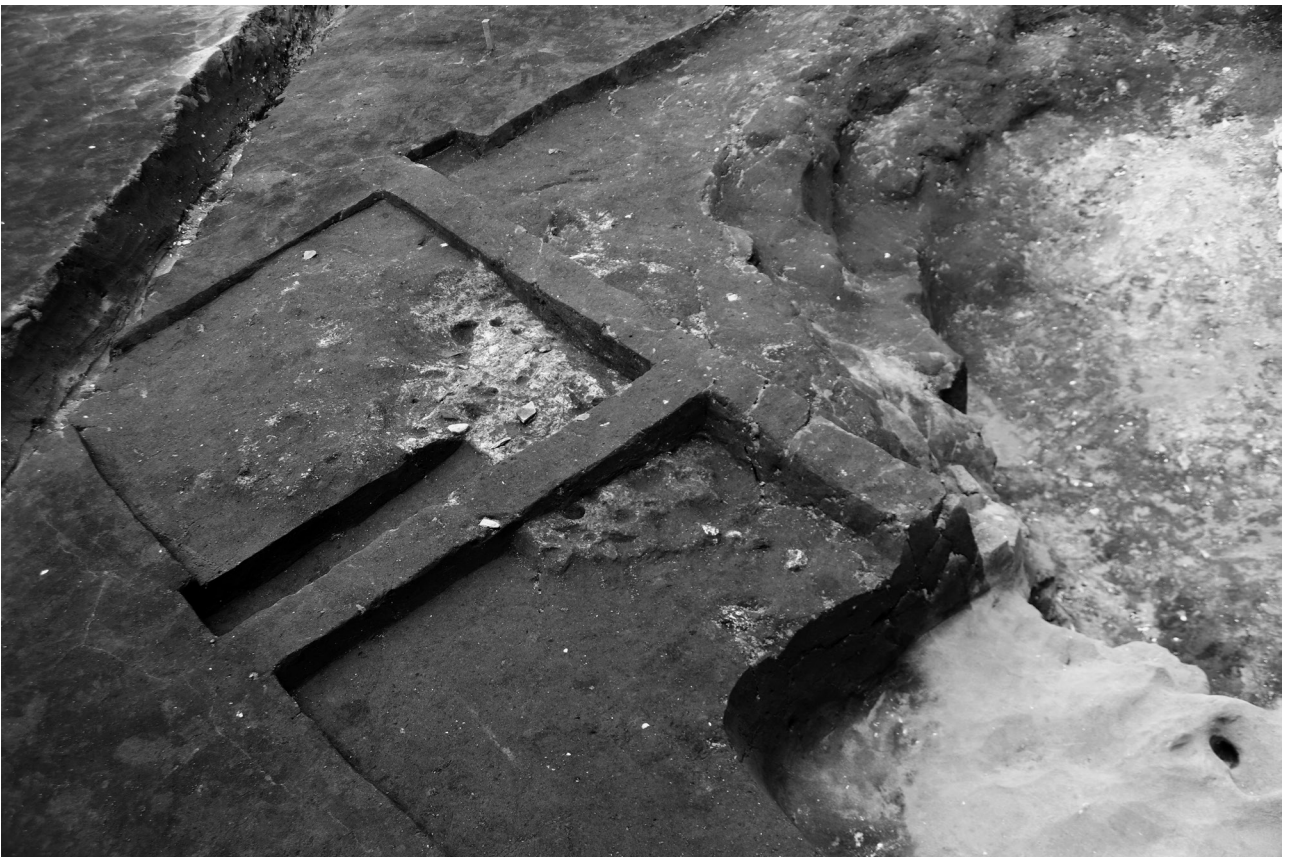
PL.5 竪穴住居跡 (SK41) 床面検出



PL.6 竪穴住居跡 (SK43) 床面検出



PL.7 竪穴住居跡 (SK47) 床面検出



PL.8 竪穴住居跡 (SK209) 埋土内灰検出



PL.9 竪穴住居跡 (SK211) 床面検出

6 遺物

遺物は、中コンテナ (60 × 40 × 15cm) 170 箱の出土量であった。

3, 4 層出土土器は、ごく小片であるものが殆どで陶磁器類が主体であるが、5 層が近づくにつれ成川式土器片が増加し、出土土器片もサイズが大きくなる。摩滅しているものも多く、耕作により、下層遺物が攪拌されていると思われる。5 層では大量の成川式土器 (笹貫式主体) が出土しており、そのほか管玉・勾玉や砥石片などが出土している。

7 まとめ

過去の周辺調査結果では、本調査区の北側エリアで河川跡と川岸付近での盛土遺構、水田跡と居住域が検出されているが、本調査によりこれまで周辺で検出されてきた古墳時代住居跡群の東北部への広がりが確認された。また、本調査区内での集落内における住居群の広がりをみると、住居跡群密集地点と住居が営まれないエリアが明瞭に区分される。古墳時代において、本エリアでは明確な土地利用意識があったことをうかがい知ることができる。

Ⅲ 試掘調査

2018-3 桜ヶ丘団地 E-7・8区 桜ヶ丘旧病棟試掘調査

脇田亀ヶ原遺跡（桜ヶ丘団地）では、平成 31 年度に新病棟建設に伴う旧病棟取り壊しを予定している。該当地点は犬走のある駐車場となっており、その犬走に張り付くような形で旧病棟が建っている。この犬走部分に相当する部分が旧病棟の建設によって破壊されているのか、遺物包含層が残っているのか確認する必要性が生じた。隣接地である駐車場では平成 23（2011）年には共同溝埋設に伴う発掘調査が実施され、アカホヤ火山灰以下の土層が存在していることが分かっていた。そのため、大学施設部および病棟解体業者との協議の結果、旧病棟のコンクリートの床を切断し、重機によって表土のみを掘削し、遺物包含層が残存しているかを確認することとなった。

病棟の地下構造を確認し、共同溝設置地点の土層深度との比較から、旧病棟の床から 100cm 深度でチョコ層が検出されるものと予想されたため、地中梁や地下施設部分を除いた部分を 6 箇所掘削することを予定した。

平成 31（2019）年 2 月 6 日は病棟内に重機を搬入し、厚さ 40cm の床面コンクリートを砕き、3 部屋内の床面を掘削した。②は 130cm 深度まで攪乱されていたが、①は 75cm 深度でサツマ火山灰層下部が検出され、15cm 下位にはチョコ層が良好に検出された。③は屋外地点であるが、アスファルト舗装を含めた表土が 50cm 深度であり、その下位にサツマ火山灰下部が残存していた。さらに 20cm 下位にはチョコ層が良好に検出された。遺物は確認されていない。

その後、病棟上屋を解体した後の平成 31（2019）年 3 月 18 日、コンクリート床を砕き、地中梁上部をむき出しにした状態で、その間を重機によって掘削確認を実施した。その結果、④は、250cm 深度まで攪乱、

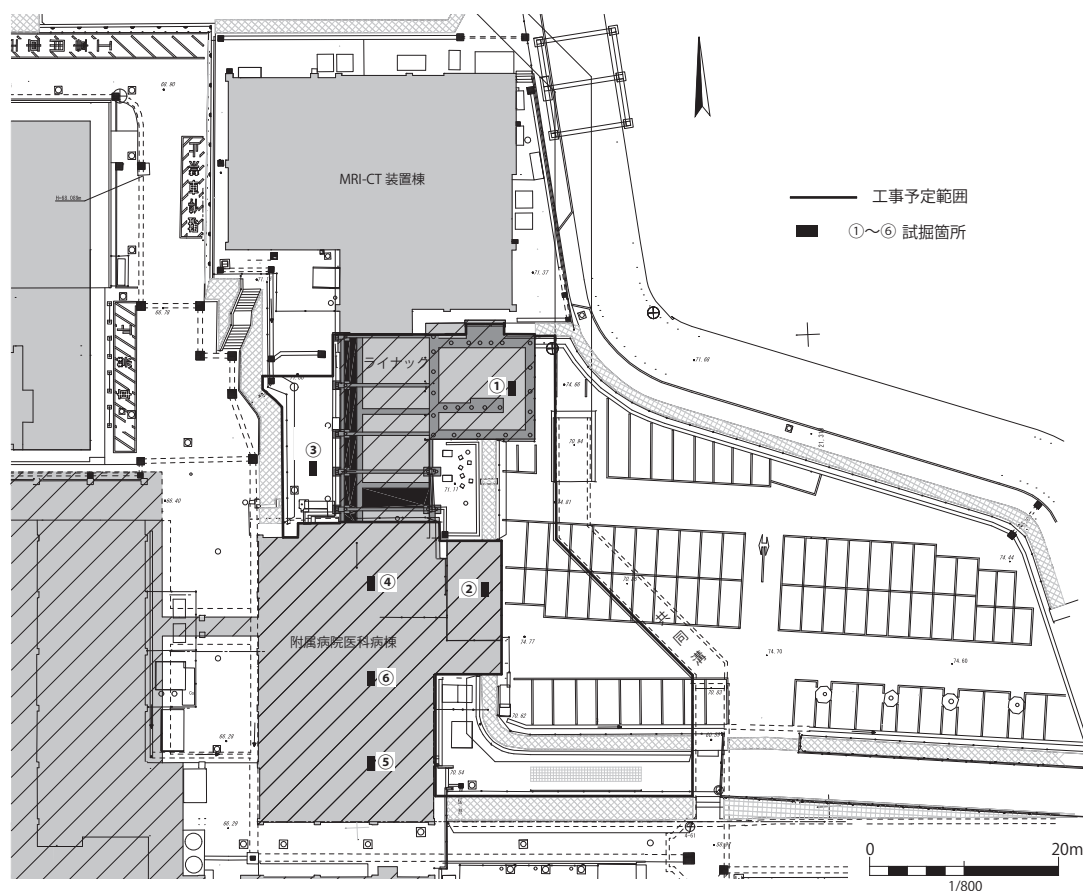


Fig.5 2018-3 掘削位置

Ⅲ 試掘調査

⑤は 145cm まで掘削したが攪乱，⑥もまた 230cm 深度まで攪乱されていた。遺物は確認されなかった。

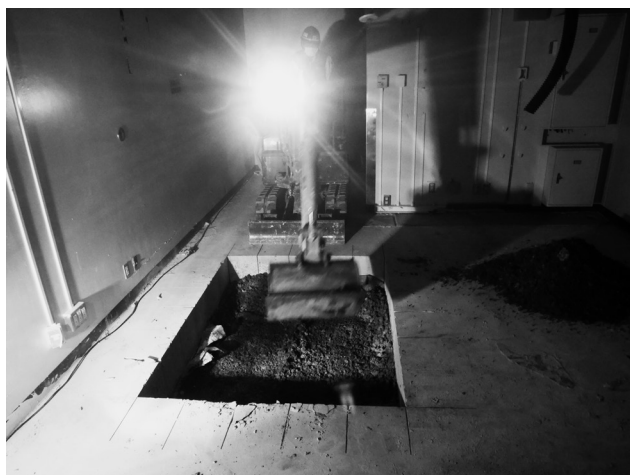
この結果を施設部に報告し，平成 31 年度における旧病棟解体に伴う発掘調査予定地の範囲の絞り込みを行なうこととなった（※発掘調査は令和元〔2019〕年 8 月から 11 月に実施された）。



PL.10 ①西より



PL.11 ①西壁一部



PL.12 ②北より



PL.13 ②東壁



PL.14 ③南より



PL.15 ③西壁

IV 立会調査

平成 30 (2018) 年度は、郡元団地内で 15 件、桜ヶ丘団地内で 1 件、計 16 件の立会調査を実施した。以下にその概要を記す。

2018-A 海洋土木工学科棟改修工事 (Fig.2・6～9, PL.16)

調査地点 郡元団地 K・L-10 区

調査期間 2018 年 5 月 17・18・21・24 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 吉留正樹

埋蔵文化財調査センター 中村直子・新里貴之・寒川朋枝

海洋土木工学科改修工事において、周辺整備に伴い再利用を想定していた既設側溝の老朽化が判明し、新設することに決定した。

A1・A2 ラインは工事深度である地表下 70cm まで掘削した。プライマリーな層を A1 (南)・A2 (北) の 2 地点で観察した。A1 にて溝 (SD1) 確認。黒色土である 4 層に掘り込まれていた。

B 地点は、塀の基礎部のやり替え (東西幅 150cm, 南北長 500cm) の予定であるが、試掘したところ、プライマリーな層が良好に残存していたことから埋蔵文化財への影響が大きいと判断し、鹿児島市・施設部との協議を実施し、改めて調査を実施することとなった。C 地点は、マンホール 2 箇所を撤去後、土層を観察した。GL-140cm まで掘削したが、底面近くは粗砂層であった。南側にプライマリーな土層が観察され、東南方向から幅不明の大型の溝 (深さ 30～40cm) を検出した。C 地点の溝埋土より弥生～古墳時代の土器片 1 点、黒色土より弥生～古墳時代の土器小片 2 点が出土し、そのうち 1 点は弥生時代後期の鉢の口縁部ではないかと思われる。

ここでは A ラインにおいて、4 層上面で検出された遺構を中心に述べる。

SD5 は石積みの水路である。溝の幅 1.1m 程度ある。70×40cm ほどの切石を布積みする。南側は三段残存し 90cm 弱あるが、北側は二段しか残っていない。表面はノミによる加工痕が残る。この溝はルート の位置からすると、鹿児島大学の前身、鹿児島高等農林学校 (明治 41 [1908]～昭和 27 [1952] 年) の

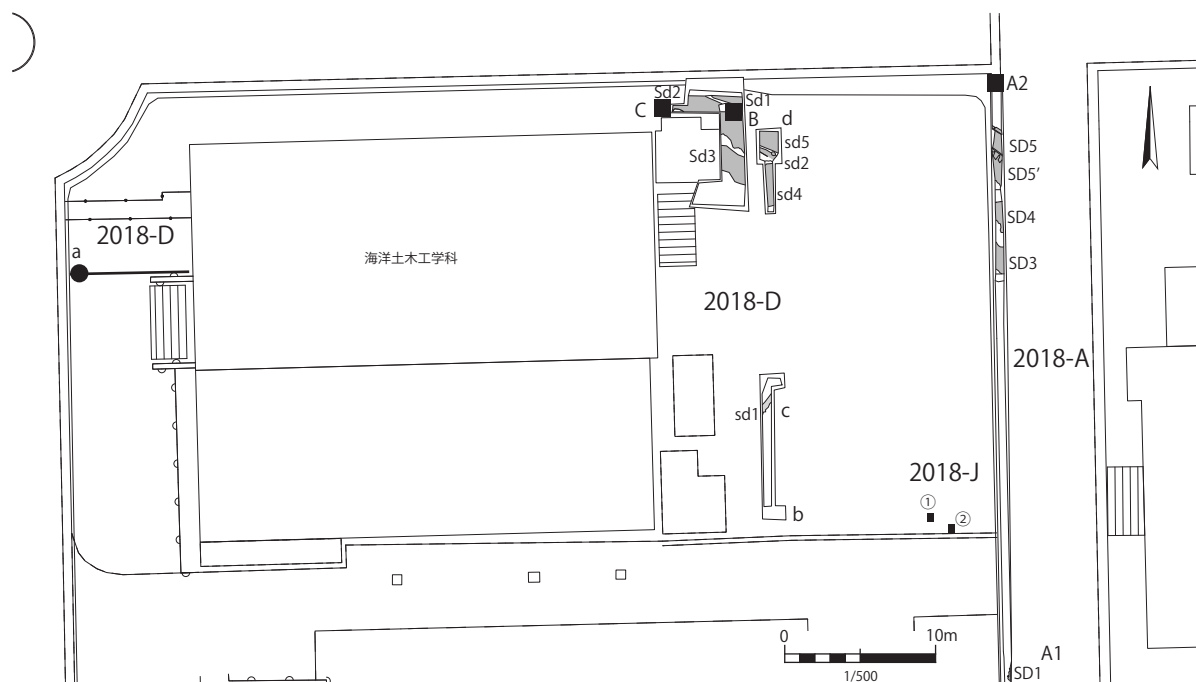


Fig.6 2018-A・D・J 立会箇所

周囲西側を巡っていた石積みの水路跡と考えられる。埋土より近現代の磁器碗 1 点が出土している。

SD5' は SD5 より古いものの、一気に土砂を投げ込んだかのような土層となっていたため、SD5 の石積みを設置するための掘り方である可能性が考えられた。掘削調査は実施していない。SD3 はおおよそ 80cm 幅の溝状遺構であるが、検出のみで終了している。SD3 は幅も攪乱によって不明である。石積みの水路を含め、どの溝状遺構も北西-南東方向で一致している。

しかしながら、最も南で検出された SD1 のみは、北東-南西方向の溝状遺構と考えられた。遺構の深さは工事深度よりも深くなっていたため、遺構下位は保護されることから、底面までの掘削は実施していない。攪乱によって遺構幅などは不明である。

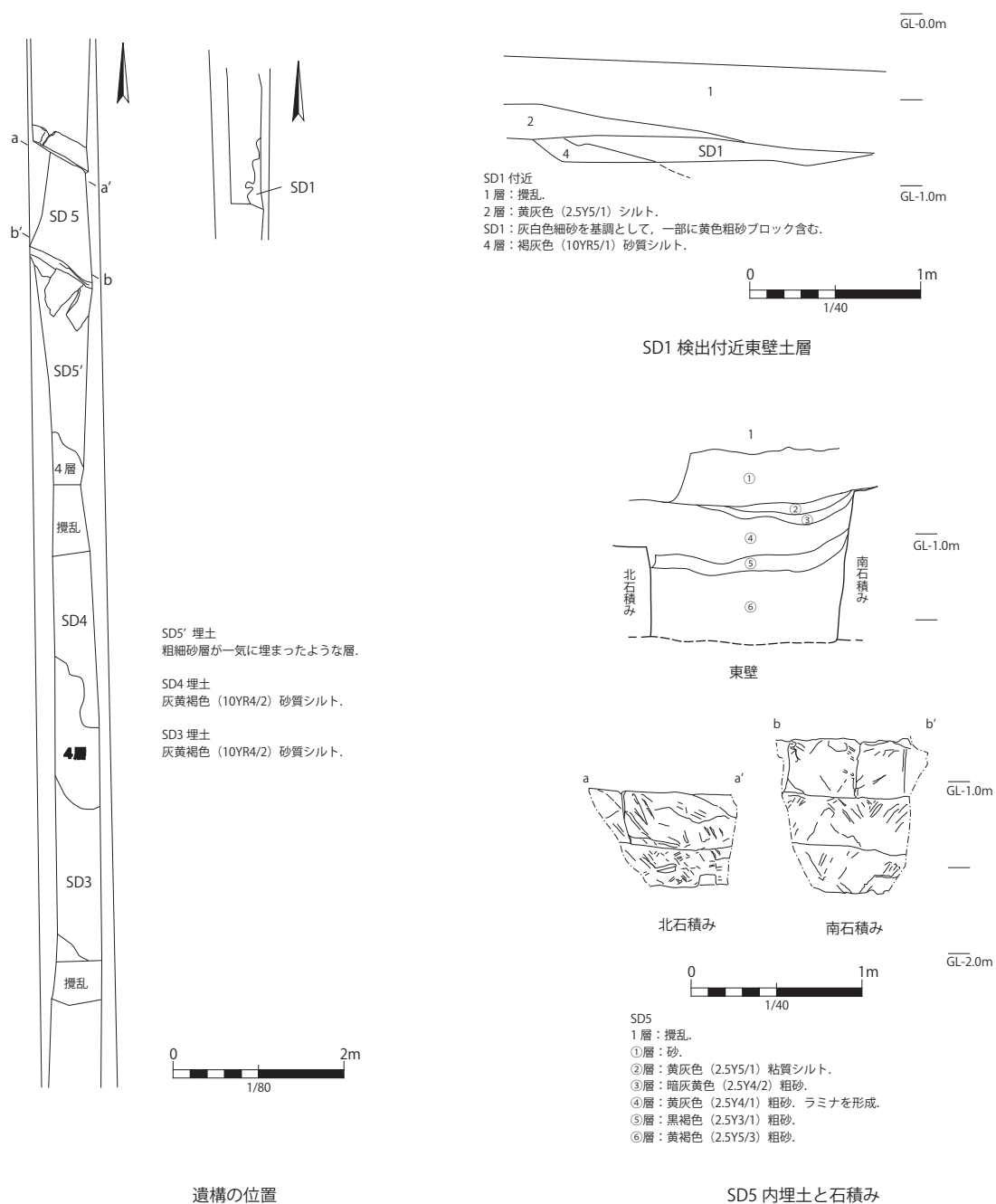


Fig.7 A ライン遺構

IV 立会調査

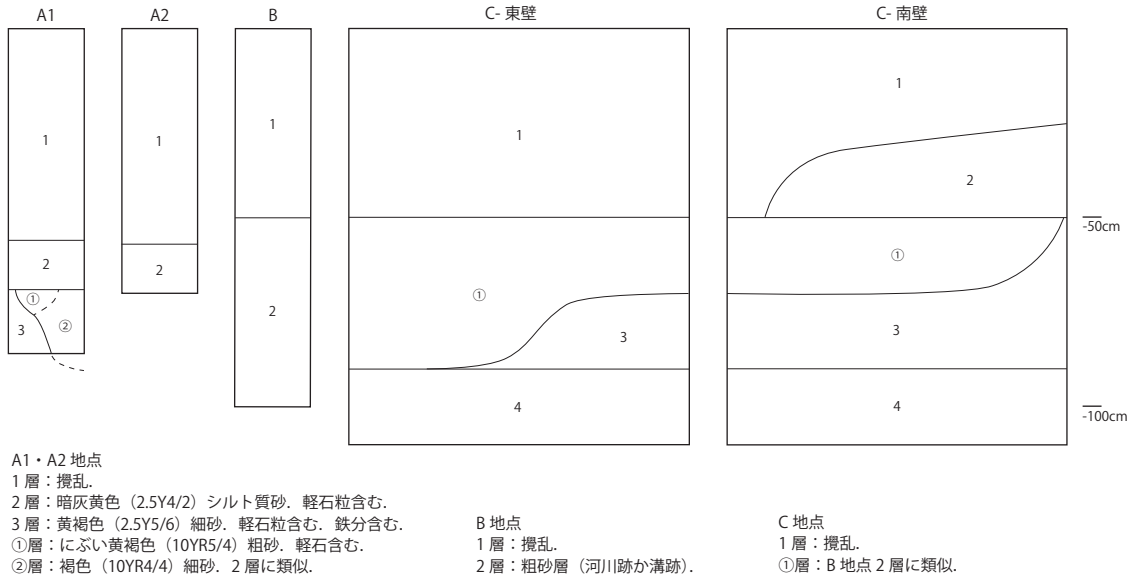


Fig.8 2018-A 土層柱状図



Fig.9 石積み水路想定位置

鹿児島大学農学部開学 75 周年記念事業実行委員会 『「あらた」七拾五年の歩み』 (1985 年)
 掲載の鹿児島高等農林学校一覧 (自昭和 11 年至昭和 12 年) 地図を改編

2018-B 東門周辺駐輪場取付工事 (Fig.2・10, PL.17)

調査地点 郡元団地 G・H-3 区

調査期間 2018年7月11日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保朋久
埋蔵文化財調査センター 中村

東門を大幅に改修するため、植物園東端水路脇の樹木伐採工事のため、現地表面より50cm深度まで掘削した。掘削予定場所のうち、3箇所(a・b・c地点)を試掘したが、工事の埋蔵文化財への影響はほとんどないと判断され、試掘調査で立会を終了した。2層は河川堆積物と思われる。

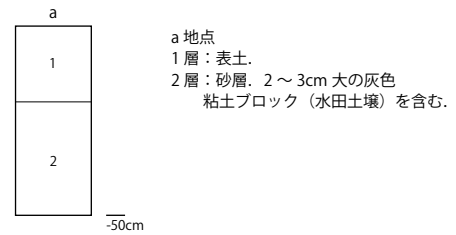


Fig.10 2018-B 土層柱状図

2018-C 保育施設新営機械設備工事・電気設備工事 (Fig.2・11, PL.18)

調査地点 郡元団地 C・D-3・4 区

調査期間 2018年4月16日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行
埋蔵文化財調査室 中村

昨年度で終了できなかった保育施設の環境整備工事の継続である。電気設備工事(2017-L) a地点については1.4×1.7m幅、地表下1.4mの深さまで掘削した。その結果、北側は攪乱されており、南側は砂層が基盤となっていることから、河岸の可能性も考えられた。同じく昨年度の機械工事(2017-K)については2箇所を掘削確認した。b地点は既設管接続部分地表下160cmまで掘削。北接部は既掘部のため攪乱されていた。c地点はフェンス北側緑地内80×150cm範囲、深さGL-1.6mまで掘削した。

a地点7層より現代磁器小杯2点(同一個体)が出土している。

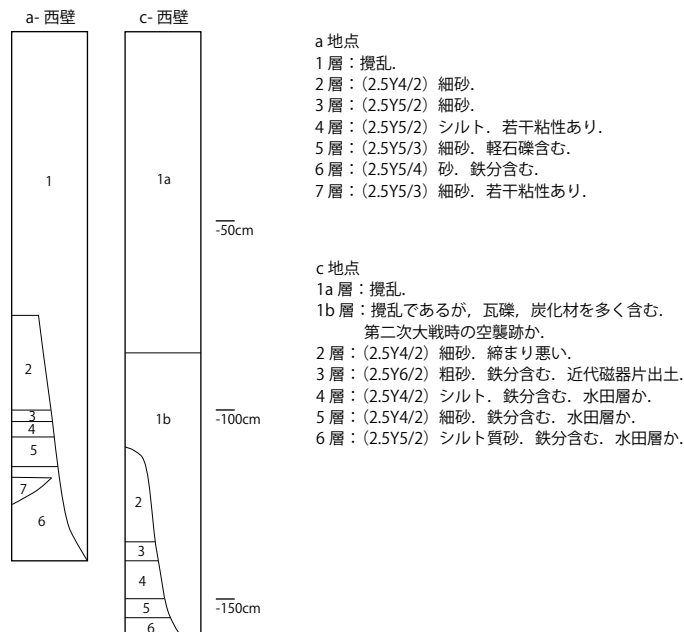


Fig.11 2018-C 土層柱状図

2018-D 海洋土木工学科棟改修機械設備工事 (Fig.2・12・13, PL.19)

調査地点 郡元団地 K・L-10・11 区

調査期間 2018年4月13・23・27日, 5月11日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保・吉留

埋蔵文化財調査センター 中村

海洋土木工学科周辺の電気設備工事に伴う立会調査では、建物西側 a 地点はコンクリートブロックを除去したところ予定の掘削深度に達したため、層位観察後調査を終了した。

校舎東側の b 地点 (90 × 150m) は掘削したところ、底面付近に 4 層の黒褐色シルト層を検出した。c 地点ではその上位で掘削最深部であったが、土層が古代の水田層と推定されたため、b-c 間 (幅 80cm) の掘削を実施し、4 層上面にて溝状遺構を検出した (sd1・幅 40cm。以下、2018-A と併せ、各トレンチで同一呼称があるので、それぞれを SD, sd, Sd で使い分ける)。埋土上部より土器片 3 点が出土している。埋土は 3 層土に類似しており、周辺の 4 層上面でも土器片数点が出土している。c 地点近くの排水管接続地点の掘削では幅 80cm、地表下 100cm まで掘削。6 層上面と 5 層より遺物が出土している。

d 地点においては 200 × 150cm、深さ GL-170cm まで掘削した結果、4 層上面で溝状遺構 2 条 (sd2・sd5) を検出した。sd2 は幅が細く埋土は 5 層土にみえる。

改めて 2018-A と 2018-D 立会調査地点の関係図を見ると (Fig.6)、4 層上面で検出された溝状遺構は、別の遺構に見えるものの、2018-D の溝状遺構の埋土は類似しており、北西-南東方向の大きな幅の溝状遺構であろう。2018-D の Sd1・Sd2・Sd3 と sd5・sd2・sd4 は同一遺構で、2018-A の SD4・SD3 とも同一である可能性がある。ただし、埋土の状況が両調査地点では若干異なることは注意される。

これに直交する方向 (北東-南西) の幅の細い 2018-D の sd1、2018-A の SD1 が存在する。3 層以上に於いては、水田層と河川砂層が堆積することから、周辺が水田地帯とその水路の一部が検出されたものと考えられる。

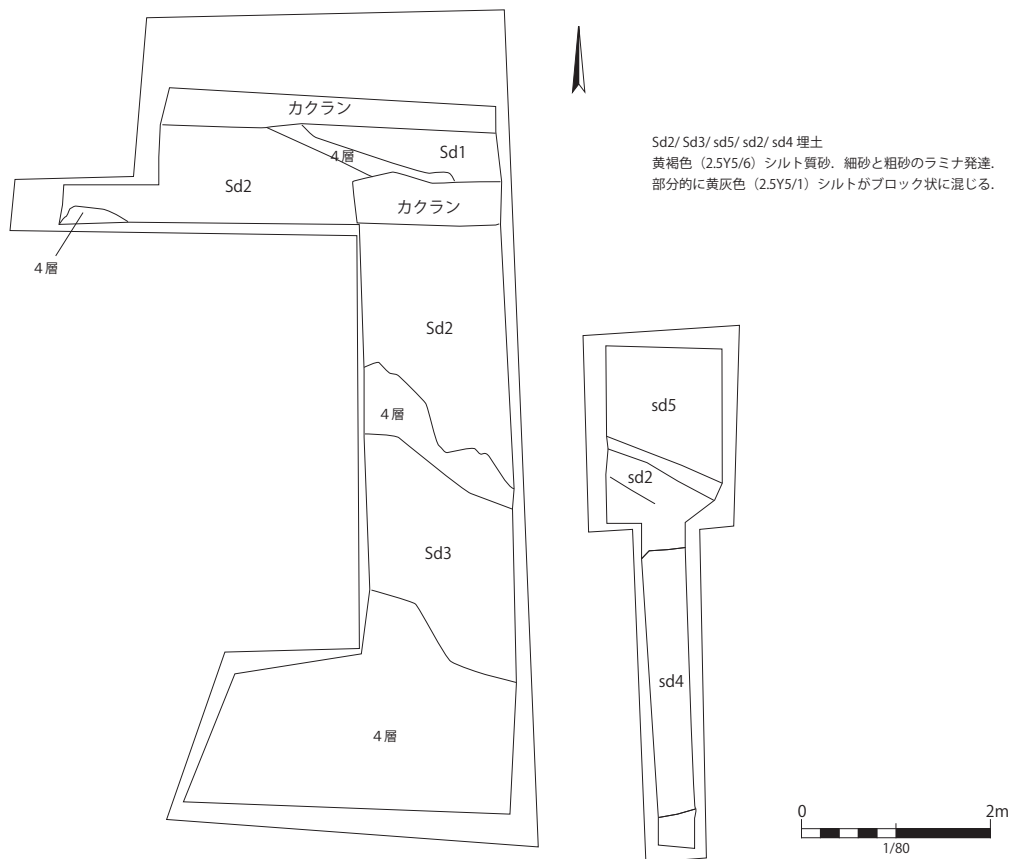


Fig.12 2018-D d 地点北側検出遺構

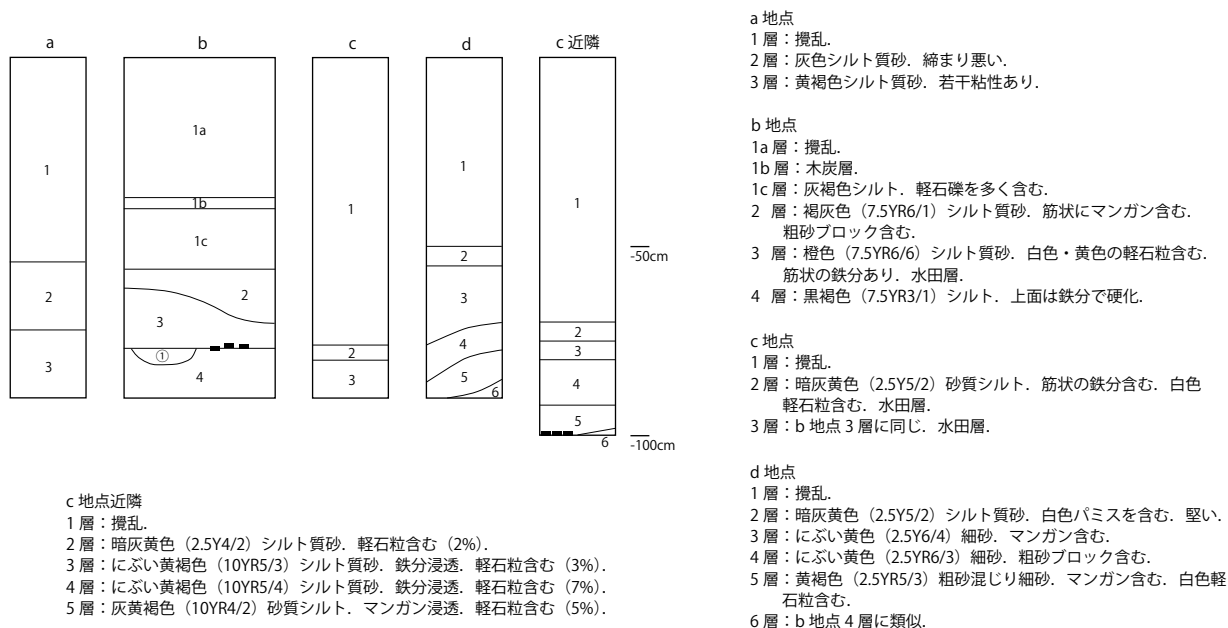


Fig.13 2018-D 土層柱状図

2018-E 中央食堂等トイレ改修機械設備工事 (Fig.2・14, PL.20)

調査地点 郡元団地 H-7 区

調査期間 2018年8月21日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川

埋蔵文化財調査センター 中村

中央食堂トイレ改修工事のため、床面コンクリートを砕り、重機で部分的に掘削した。掘削深度は地表下80cmであり、下部に水田層が確認された。この水田層は近代以降の水田跡であると判断され、埋蔵文化財に影響はないと考えられたため、調査を終了した。周辺地点においても工事深度は同様であるとのことから、慎重工事として対応した。

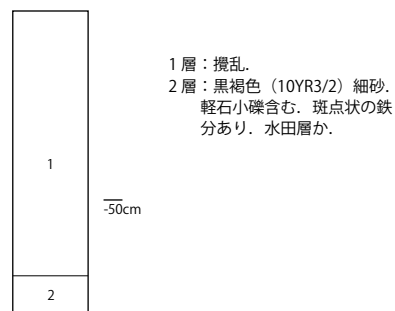


Fig.14 2018-E 土層柱状図

2018-F 機械工学科2号棟改修電気設備・機械設備工事 (Fig.2・15・16, PL.21)

調査地点 郡元団地 I-11・12 区

調査期間 2019年2月7・8日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保

埋蔵文化財調査センター 新里・寒川

機械工学科棟改修工事に伴う機械・電気設備工事である。

①は掘削部北東隅に土層がわずかに残っている程度であり、大部分がフーチングによって破壊されていると判断された。②は90cmの掘削であったが、海産貝類が多量に含まれた土壌であったので、全て攪乱部と判断した。③は地表下80cm掘削して6枚の土層が確認された。4層は溝状の落ち込みだと判断された。6層からは弥生時代～古墳時代に相当する土器小破片が6点出

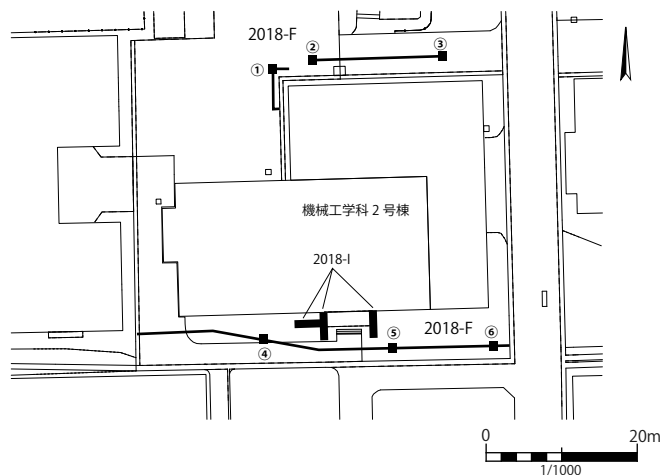


Fig.15 2018-F・I 機械工学科2号棟周辺立会箇所

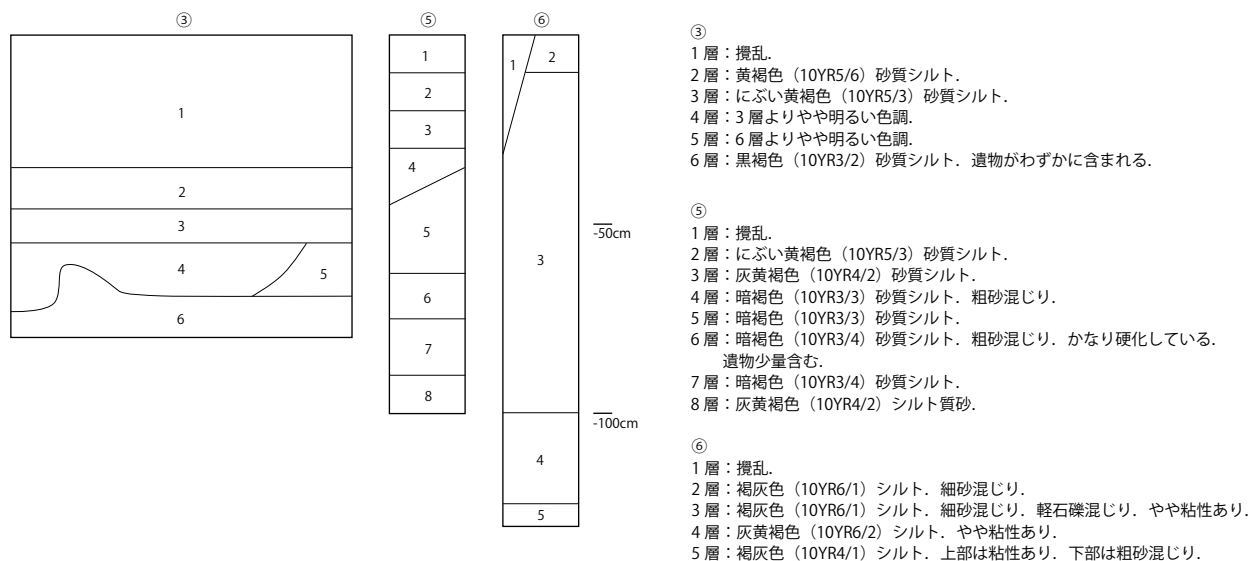


Fig.16 2018-F 土層柱状図

土している。④は地表下 1.0m 掘削だが、その深度でヒューム管が確認されたので、攪乱と判断した。⑤は地表下 1.0m まで掘削し、8 枚の土層を確認した。この地点では 6 層より弥生時代～古墳時代の土器小破片 1 点が出土している。⑥は GL-130cm を掘削し、5 枚の層を確認している。遺物は出土していない。

2018-G 構内駐車場案内サイン設置 (Fig.3・17, PL.22)

調査地点 桜ヶ丘団地 C-6, L・M-7・8 区
調査期間 2018 年 7 月 23 日
調査担当 鹿児島市教育委員会 新保
埋蔵文化財調査センター 中村

桜ヶ丘団地では、敷地内に 12 箇所
の看板サインを設置する計画が実施
された。これまでの土層データから、
このうち 3 か所に絞り込んで掘削箇
所を立会した。a 地点は 2 層目に近
世の黒ボク土が確認された。b 地点
は 2 層目に黒色砂質土が確認され、
c 地点は 2 層目に黒色砂質土、3 層目
にサツマ火山灰層を検出した。土層
は良好に残存していたものの、遺物
は出土していない。

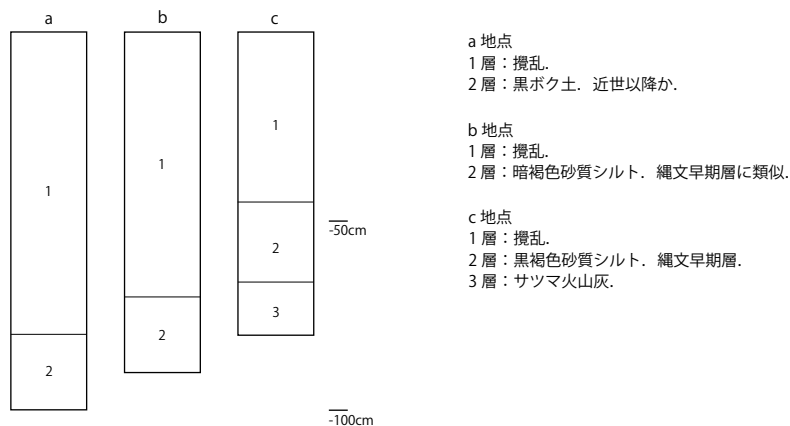


Fig.17 2018-G 土層柱状図

2018-H 東門周辺駐輪場等改修電気設備工事 (Fig.2・18, PL.23)

調査地点 郡元団地 H-3 区
調査期間 2018 年 8 月 6 日
調査担当 鹿児島市教育委員会 有川
埋蔵文化財調査センター 中村

東門周辺を改修し、北側に駐輪場および外灯を設置するための掘削工事が行なわれた。深く掘削する外灯

設置箇所 1 箇所のみを確認した。当該地点では地表下 90cm までに 4 枚の層を確認できた。2 層は近世, 3 層は中世, 4 層は古墳時代に相当する。4 層からは成川式土器甕に相当する大型の胴部破片 2 点が出土した。

2018-I 機械工学科 2 号棟改修工事 (Fig.2・15)

調査地点 郡元団地 I-12 区

調査期間 2019 年 2 月 7 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保

埋蔵文化財調査センター 新里

機械工学科棟改修工事に伴い, 入り口の手摺り基礎部と近くにあるマンホールのやり替え工事が実施されることになった。同地点は支障管の入り組んだ狭い箇所であり, 掘削深度も GL-60 ~ 65cm とされていたため, その前面の配管工事 (2018- F ④・⑤・⑥) の土層を確認することで対応することにした。結果は, 2018- F に記載。

2018-J ごみ置き場設置に係わる基礎工事 (Fig.2・6・19, PL.24)

調査地点 郡元団地 L-10 区

調査期間 2012 年 7 月 5 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保

埋蔵文化財調査センター 中村

工学部のごみ置き場 5 箇所の設置のための基礎工事が予定された。このうち 1 箇所のみ地表下 60cm まで掘削する予定となっているため, この 1 箇所のみを調査対象とした。a 地点は 65cm から包含層が確認された。b 地点については, 地表下 57cm まで地表下 42cm でシルト層が確認された。遺物は出土していない。

2018-K サイン設置その他工事 (Fig.2・20, PL.25)

調査地点 郡元団地 N-6・O-3 区

調査期間 2018 年 9 月 10・11 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川

埋蔵文化財調査センター 中村

教育学部敷地内において, 2 箇所のサイン設置が予定された。①地点は 200cm × 95cm 幅, 地表下 70cm の掘削であったが, 底面まで築山の盛土であった。②地点は地表下 70cm の掘削であったが, 地表下 48 ~ 55cm 地点より水田層が確認された。表土よりコンクリートに覆われた現代磁器の皿底部が出土した。

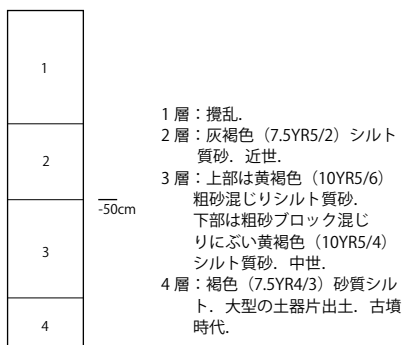


Fig.18 2018-H 土層柱状図

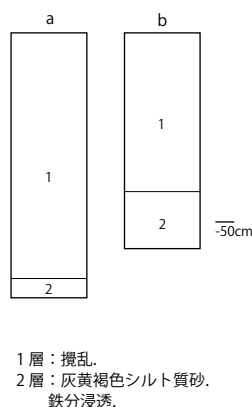


Fig.19 2018-J 土層柱状図

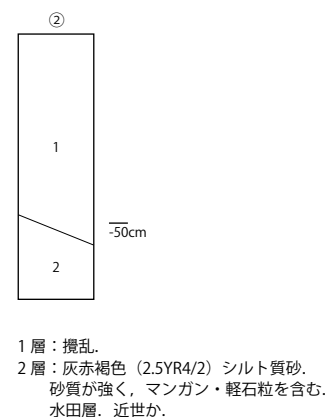


Fig.20 2018-K 土層柱状図

2018-L 共用棟給水設備改修工事 (Fig.2・21, PL.26)

調査地点 郡元団地 L-9 区

調査期間 2018年9月18日

調査担当 鹿児島市教育委員会 吉留
埋蔵文化財調査センター 中村

大学では学部建物の改修時の仮の移転先として、共用棟というプレハブの建物が設置されている。このプレハブの上水道は井水だけであり、市水は導入されていなかった。工学部の改修工事に伴い、実験用の市水が必要になったことから、急遽、設置工事を実施することとなった。掘削深度は地表下 50cm である。立会では導入ルート上の 3 箇所を確認したが、ほとんど攪乱されており、B 地点のみ地表下 44cm でプライマリーな層を確認することができた。遺物は出土していない。

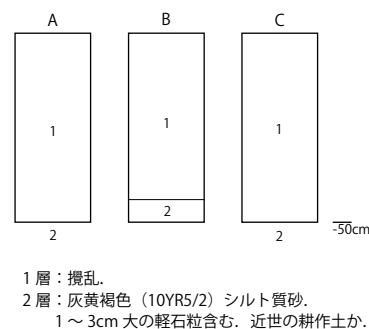


Fig.21 2018-L 土層柱状図

2018-N 法文学部第1動物実験舎南側駐車場等整備工事 (Fig.2・22, PL.27)

調査地点 郡元団地 K-3, P-4・5 区

調査期間 2019年1月16日, 2月21日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保
埋蔵文化財調査センター 中村・新里

法文学部第1動物実験舎南側駐車場において、整備工事が予定された。a 地点は地表下 80cm の掘削であり全て盛土であった。b 地点は外灯設置のため基礎部分を地表下 95cm まで掘削し、5 枚の層を確認した。5 層で弥生～古墳時代土器小破片 1 点が出土した。

同工事に関連し、教育学部敷地内の車道整備工事も実施された。水道管配管ルート 3 箇所を掘削したが、c 地点は地表下 60cm 掘削したが、掘削部底面に水田層らしきプライマリーな層が検出された。1 層からは昭和 40 年代の生協のどんぶり碗の破片（美濃窯業株式会社製陶部）および現代磁器の大型製品底部が出土した。d 地点は地表下 60cm まで攪乱され、掘削部底面にピンクシラスの充填が確認されたため、大幅に攪乱されていると判断された。e 地点は 65cm まで掘削したが攪乱されており、底面に水田層が確認された。

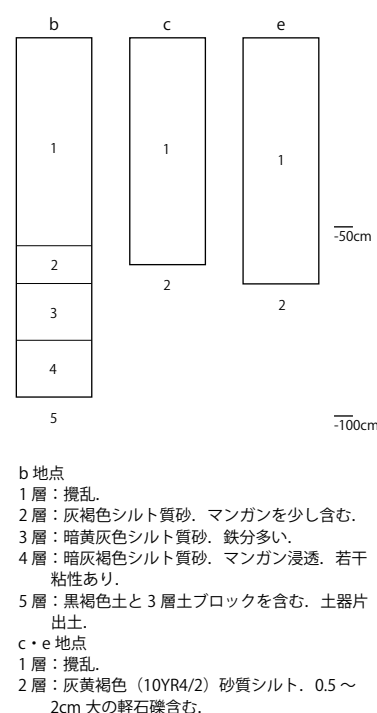


Fig.22 2018-N 土層柱状図

2018-O 附属中学校等コンクリートブロック塀改修工事 (Fig.2・23, PL.28)

調査地点 郡元団地 S・T-8・9 区

調査期間 2019年1月24日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保
埋蔵文化財調査センター 中村

2018年6月の大阪北部地震ブロック塀倒壊事故を受けて、附属中学校の古いブロック塀もフェンスにやり直しが実施される予定となった。そのため、予定地のうち 2 箇所の掘削（工事深度地表下 100cm）を実施した。結果、a 地点では地表下 38cm で遺物包含層が確認され、b 地点では地表下 15cm でそれが確認された。また、a 地点では掘削部南西隅には深さ 30cm のピットが検出された。同層は主に古墳時代～古代の遺物包含層であり、遺構も存在することが判明したため、埋蔵文化財への影響は大きく、追加掘削である 26 箇所は立会調査では対応できないと判断された。鹿児島市教育委員会職員とともに現場協議の上、92 条を届け出、発掘調査を実施する運びとなった（発掘調査は平成 31 年 2 月に実施された）。

2018-P 稲盛記念会館（仮称）工事 (Fig.2・24, PL.29)

調査地点 郡元団地 J-4・5 区

調査期間 2019年2月1日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保

埋蔵文化財調査センター 中村

稲盛記念会館（仮称）予定地調査終了後、周辺設備工事が実施されることとなった。水道管、ガス管、汚水管、雨水管であり、建物の西側に集中する。

水道管設置箇所については、a地点においては工事深度（GL-60cm）まで攪乱されていた。汚水・雨水管設置箇所においては、b地点において地表下79cmでプライマリーな層である水田層が確認されている。ガス管設置箇所は3箇所を確認し、c地点においては地表下70cmで攪乱、d地点において地表下50cmでプライマリーな近世の水田層が検出され、底面の70cmで中世の畑層が確認された。どの確認地点からも遺物は出土していない。

2018-Q 道路標識等設置工事 (Fig.2・25, PL.30)

調査地点 郡元団地 G-10・K-7 区

調査期間 2019年3月19・20日

調査担当 鹿児島市教育委員会 新保

埋蔵文化財調査センター 中村

郡元団地内において、11箇所の道路標識設置が予定されたが、遺物包含層に達すると予想される2箇所について立会調査を実施した。15地点は樹木に近接していたため、太い根に掘削を阻まれ、深さ50cmしか掘れなかった。そのため、工事業者・施設部と現地協議し、小さな基礎に変更することとなり、予定より浅い部分で掘削を終了した。11地点は工事深度80cmを掘削した。地表下55cmで近世～近代の水田層が確認された。

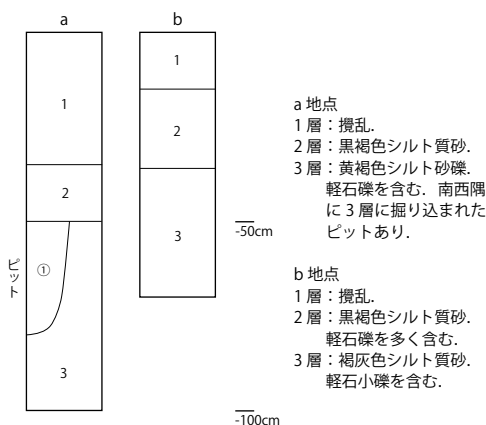


Fig.23 2018-O 土層柱状図

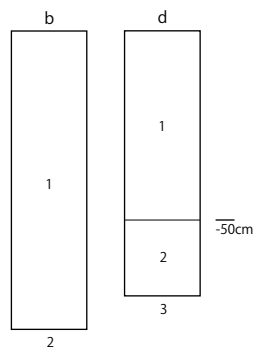


Fig.24 2018-P 土層柱状図

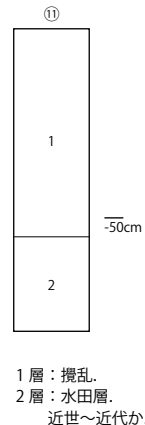


Fig.25 2018-Q 土層柱状図

まとめ

平成30（2018）年度立会調査は、鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）がメインとなり、ほぼキャンパス全域で調査が行われた。主に遺物が得られたのは、海洋土木工学科棟周辺（2018-A・D）、機械工学科2号棟周辺（2018-F）、東門周辺域（2018-H）である。土器は小破片が多く、図化できないものがほとんどであるが、弥生時代～古墳時代にかけて郡元団地北半部を東西に横切る河川跡とその周辺の水田域、集落域と想定される地点であった。脇田亀ヶ原遺跡（桜ヶ丘団地）においても、良好な土層の確認はできたが、遺物などは得られなかった。今後も引き続き慎重な調査を実施していきたい。

IV 立会調査



1 SD3・4 検出 (南より)



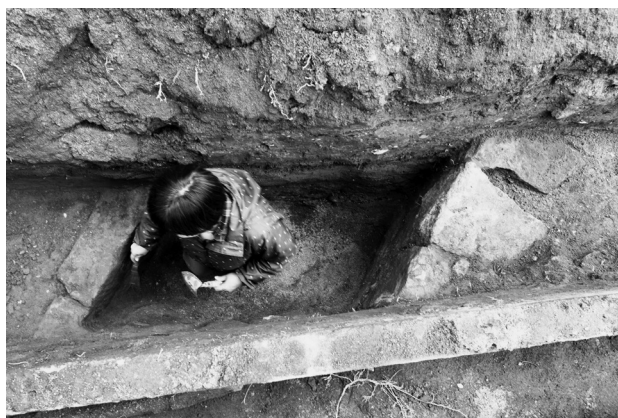
2 SD3 検出 (西より)



3 SD4 検出 (西より)



4 SD5' 検出 (西より)



5 SD5 検出 (西より)



6 SD5 南側石積み



7 SD1 検出 (西より)

IV 立会調査



1 調査地点（北より）



2 a地点

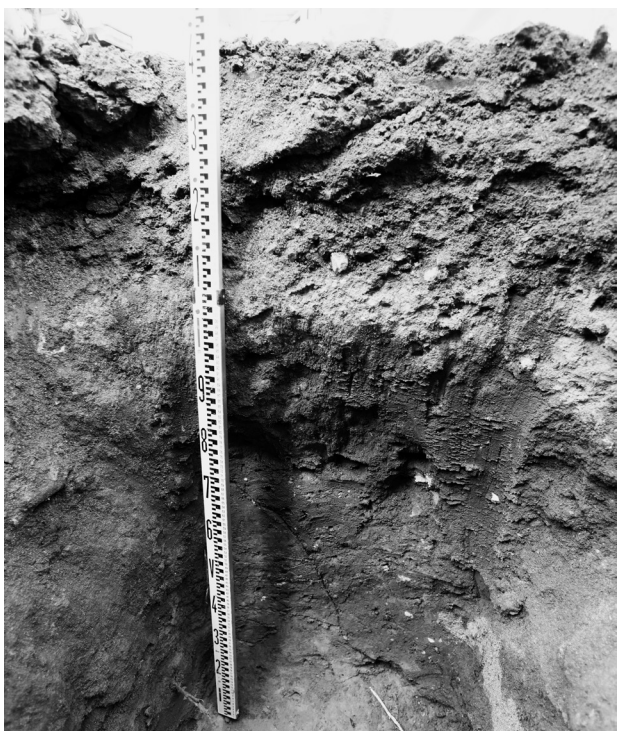
PL.17 2018-B



1 a地点（南より）



2 b/c地点（北より）手前穴がb地点、後方重機がc地点



3 a地点西壁



4 c地点西壁

PL.18 2018-C

IV 立会調査



1 c地点sd1 検出 (北より)



2 b地点北壁



3 d地点sd5・sd2 検出と南壁



4 c地点付近接続ライン土層

PL.19 2018-D

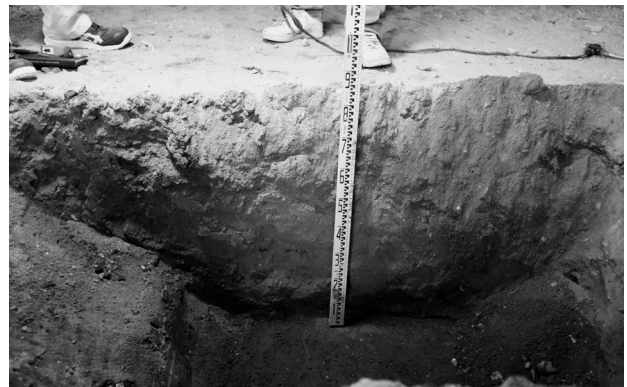


5 a地点北壁



1 調査地点 (南より)

PL.20 2018-E



2 西壁



1 ①地点（北より）



2 ①地点北壁



3 ③地点（東より）



4 ③地点北壁



5 ⑤地点（南より）



6 ⑤地点東壁

PL.21 2018-F



1 a 地点掘削（西より）



2 c 地点掘削（西より）

PL.22 2018-G

IV 立会調査



1 調査地点（北より）



2 南壁土層拡大

PL.23 2018-H



3 南壁



1 調査地点（西より）



2 b地点南壁

PL.24 2018-J

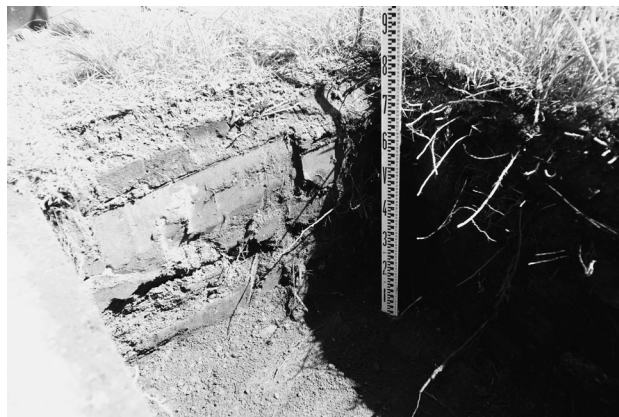


3 a地点北壁

IV 立会調査



1 ①地点 (北より)



2 ①地点東壁



3 ②地点 (西より)



4 ②地点西壁

PL.25 2018-K



1 調査地点 (西より)



2 a 地点南壁



3 b 地点南壁



4 c 地点南壁

PL.26 2018-L

IV 立会調査



1 法文学部 a 地点 (北より)



2 a 地点東壁



3 法文学部 b 地点 (北より)



4 b 地点東壁



5 教育学部調査地点 (東より)



6 教育学部 c 地点 (西より)



7 教育学部 a 地点 (東より)

IV 立会調査



1 a 地点 (北より)

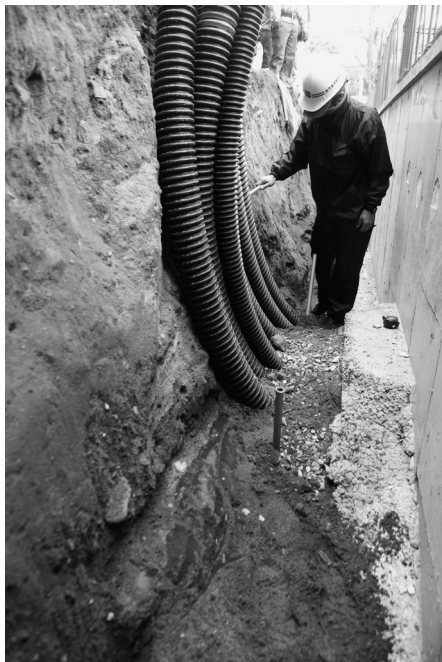


2 a 地点南壁



3 b 地点南壁

PL.28 2018-O



1 a 地点東壁



2 b 地点北壁



3 d 地点北壁

PL.29 2018-P



1 ㊸地点 (南より)



2 ㊸地点

PL.30 2018-Q

V ボーリング立会・地中レーダー探査

1 学生寄宿舍（唐湊遺跡）ボーリング立会（Fig.26, Tab.2, PL.31・32）

平成 30（2018）年度に学生寄宿舍（唐湊団地：唐湊 1）の改修ならびに新営工事が計画された。同敷地内は唐湊遺跡という周知の遺跡であり、平成 2（1990）年度の立会調査において、縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代、平安時代の遺物が出土し、土層においてはアカホヤ火山灰やサツマ火山灰が確認されている¹⁾。そこで、工事計画について施設部と埋蔵文化財調査センターとで協議を行ない、計画に先立ちボーリング調査を実施することとなった。

6月の立会では掘削し終えた5箇所を現地で土層確認し（No.1～5）、9月には、13日に業者と現地打ち合わせの後、掘削地点の3箇所（No.6～8）は後日の写真等による土層確認とした。

その結果、No.1・3・4地点では、客土以下は入戸火砕流の2mほど下部に相当するピンクシラスになっており、旧地形は大きく削平されていることが判明した。それに対しNo.2・5・6・7・8地点では、アカホヤ火山灰や黒色砂質土（縄文時代早期）以下の遺物包含層が良好に包蔵されているだけでなく、特にNo.5・6地点は通常の台地上の堆積に比べ各層が厚く堆積しており、No.5・6を結ぶラインには、現地形と大きく異なる谷のような旧地形が走っている可能性が考えられた。

したがって、同地点における校舎新営工事が今後計画される場合は、埋蔵文化財に対する配慮が必要になることを施設部に伝えた。

注

- 1) 松永幸男ほか 1992『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅶ 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

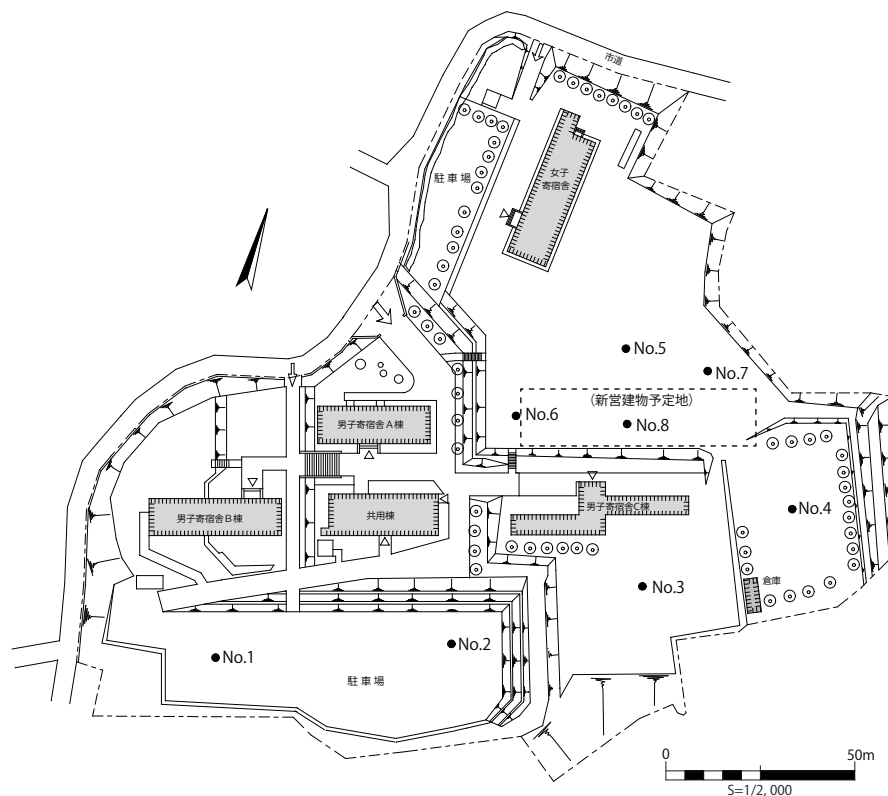


Fig.26 学生寄宿舍（唐湊遺跡）ボーリング立会箇所

Tab.2 唐湊遺跡ボーリング結果

位置	深さ	内容	確認日	備考
No.1	0~80cm 80~300cm	客土 入戸火砕流（ピンクシラス）	2018.6.11	包含層なし
No.2	0~90cm 90~135cm 135~160cm 160~350cm 350~390cm 390~900cm	客土 アカホヤ火山灰 黒色砂質土（縄文早期） サツマ火山灰 黒色粘質土（後期旧石器～縄文草創期） 入戸火砕流（シラス）	2018.6.12	
No.3	0~50cm 50~300cm	客土 入戸火砕流（ピンクシラス）	2018.6.13	包含層なし
No.4	0~470cm 470~600cm	客土 入戸火砕流（ピンクシラス）	2019.6.14	包含層なし
No.5	0~130cm 130~160cm 160~320cm 320~580cm 580~770cm 770~860cm 860~1500cm	客土 黒ボク土（縄文後期～平安時代） アカホヤ火山灰 黒色砂質土（縄文早期） サツマ火山灰 黒色粘質土（後期旧石器～縄文草創期） 入戸火砕流（シラス）	2019.6.18	通常より各層の 堆積が厚い
No.6	0~200cm 200~265cm 265~700cm 700~930cm 930~1200cm	入戸火砕流（シラス）の二次堆積？ 黒色土の二次堆積？ アカホヤ火山灰の二次堆積？ 黒色砂質土（縄文早期）の二次堆積？ サツマ火山灰の二次堆積？	2019.9.18	通常より各層の 堆積が厚い
No.7	0~150cm 150~180cm 180~345cm 345~380cm 380~1300cm	客土およびアカホヤ・黒ボク土の二次堆積 黒色砂質土（縄文早期） サツマ火山灰 黒色粘質土（後期旧石器～縄文草創期） 入戸火砕流（シラス）	2019.9.19	
No.8	0~25cm 25~35cm 35~175cm 175~200cm 200~1000cm	客土 黒色砂質土（縄文早期） サツマ火山灰 黒色粘質土（後期旧石器～縄文草創期） 入戸火砕流（シラス）	2019.9.21	



PL.31 No.1



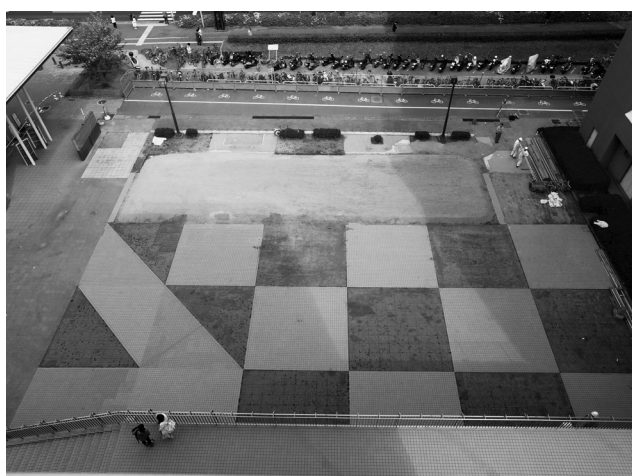
PL.32 No.5

2 稲盛記念館（仮称）新営工事に伴う発掘調査前の地中レーダー探査（PL.33～36）

平成30（2018）年4月4日および24日、稲盛記念館（仮称）新営工事に伴う発掘調査を実施する前に、地中レーダー探査を実施した。探査は調査センター員のみで実施した。当該箇所は古墳時代の住居跡群が検出されることが予想される地区であり、地中レーダー探査を実施して関連データを得、後日実施される発掘調査成果との整合性を確認することを目的とした。

レーダー機器は、Sensors & Software社製 NOGGIN 250MHz およびその解析ソフト EKKO MAPPER Ver.4 を用いた。文系総合研究棟北側に位置する「憩いの広場」にあった上屋建物解体後、重機による表土掘削前の探査を4月4日に実施した。実施後にデータを確認したが、広場全面に敷設されているインターロッキング箇所の反応が思わしくなかったため、インターロッキング等除去後の24日に、再度探査を実施した。

9月の発掘調査終了後、各層における遺構や遺物出土状況記録が確認された。現代の攪乱、3層上面の畝跡、4層上面の土坑、5層中の古墳時代の住居跡群や土坑群のデータが記録されたことから、現在、地中レーダー探査のデータと照合中である。



PL.33 稲盛記念館（仮称）建設前



PL.34 探査の様子



PL.35 探査の様子



PL.36 探査の様子

3 郡元団地北辰通り地中レーダー探査（Fig.27, PL.37）

平成30（2018）年12月14・15日にかけて、地中レーダー探査の専門でもある東京国立博物館阿見雄之氏を招聘して、本調査センターが所蔵するレーダー機器 Sensors & Software社製 NOGGIN 250MHz およ

びその解析ソフト EKKO MAPPER Ver.4 の講習、そして北辰通りにおける探査を実施した。

鹿大構内遺跡（郡元団地）においては、平成 13（2001）年度の理学部改修地発掘調査（2001-2）ならびに平成 19（2007）年度の共通教育棟 2 号館改修工事に伴う発掘調査（2007-2）において、弥生時代中期前半の溝の一部が確認されており、これらを結ぶと直径約 80m の環濠状の溝になり、北辰通りも横切っていると予想されている。その大半は未検出であるため、人通りの少ない大学休業である土曜日を利用し、調査を実施した。探査には法文学部教員 1 名、大学院生 1 名も参加している。

現在、データを解析中である。



PL.37 探査の様子

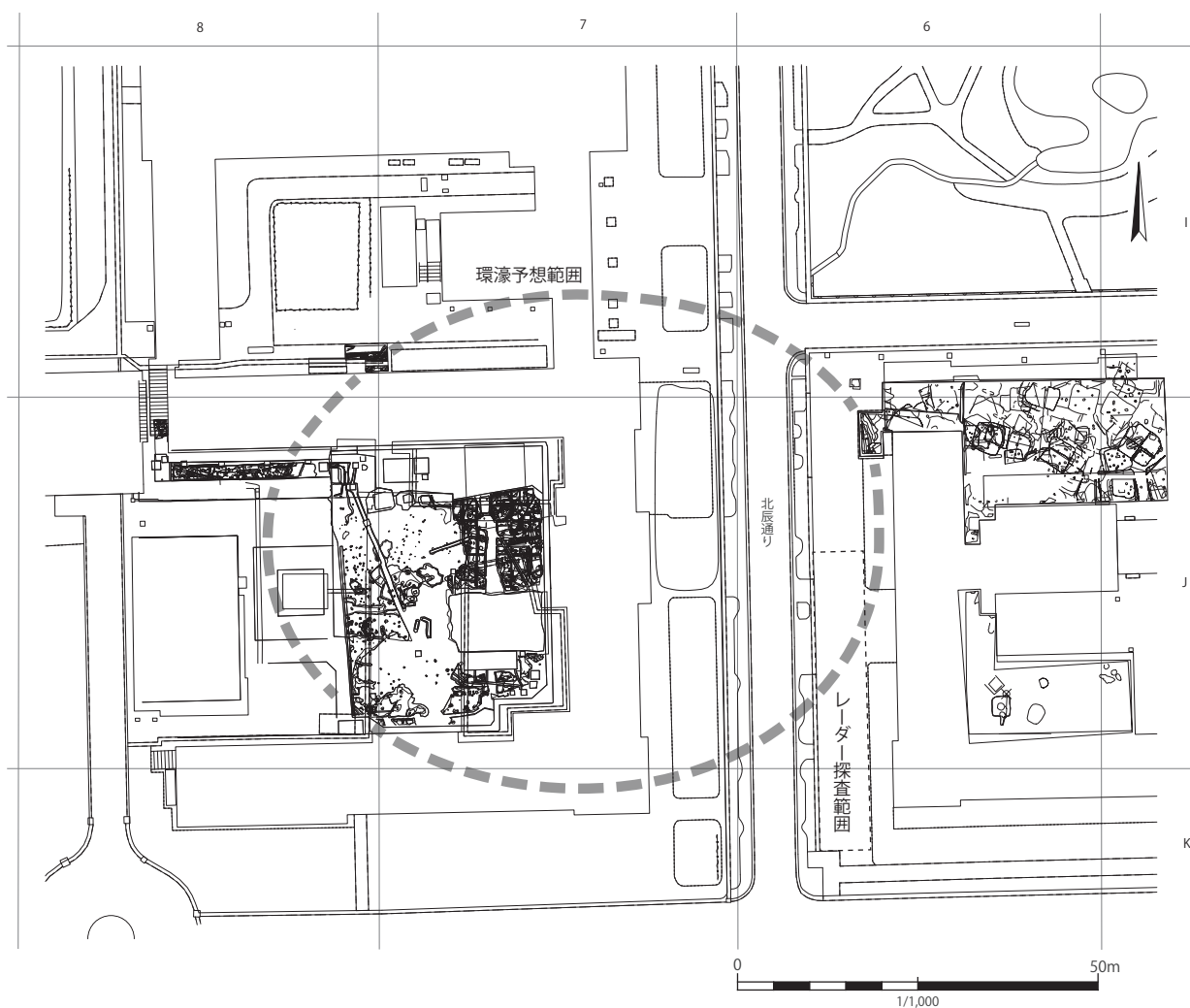


Fig.27 弥生時代環濠想定範囲および探査範囲

VI 整理

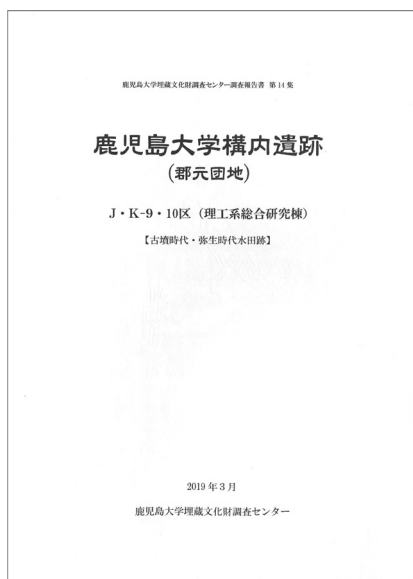
平成 30（2018）年度刊行予定である、昭和 51（1976）年度理学部 2 号館増築予定地（釘田第 8 地点）発掘調査出土遺物、縄文土器、弥生土器、陶磁器、石器類の実測・トレースを実施した。また、同年刊行予定の年報 33 掲載予定である平成 29（2017）年度の立会調査遺物（2017- B～J）の洗浄・注記・実測・トレースを行なった。

また、平成 31 年度以降報告予定の、平成 8（1996-1）年度防火水槽取設工事遺物の実測・トレースを行なった。ほかにも平成 30 年度以降、国立歴史民俗博物館に展示貸出するために、昭和 51（1976）年度理学部 2 号館増築予定地（釘田第 8 地点）発掘調査における古墳時代成川式土器の器種セット 7 点（甕・大壺・台付鉢・鉢・高坏・埴・ハソウ）の部分的復元、写真撮影を行なった。

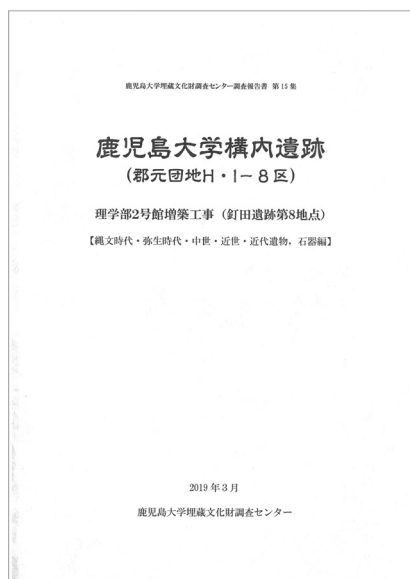
VII 刊行

平成 14（2002）年理工系総合研究棟（旧称・総合研究棟 II）建設に伴う発掘調査（2002-1）の正式報告を掲載した『鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第 14 集』、昭和 51（1976）年度理学部 2 号館増築予定地（釘田第 8 地点）発掘調査（1976-1）出土遺物のうち、縄文土器、弥生土器、陶磁器、石器類を掲載した『鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第 15 集』を刊行した。

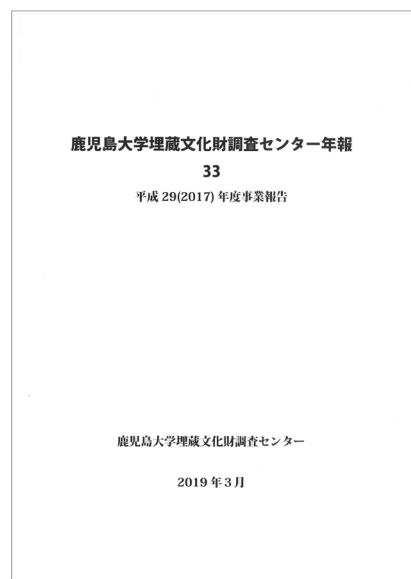
平成 29（2017）年度の事業である立会調査報告（2017- B～J）、郡元団地内におけるレーダー探査による遺構確認調査ほかの事業を掲載した『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 33』を刊行した。



PL.38 調査報告書第 14 集



PL.39 調査報告書第 15 集



PL.40 年報 33

VIII 保管

毎年実施している遺物保管作業として、遺物収蔵状況確認を 14 か所で行なった（9 月）。また、3 箇所保管してある木製品保管水槽の水替えを実施した（10 月）。

IX その他

1 遺跡見学

2018-1 稲盛記念館（仮称）新営工事に伴う発掘調査期間中、大学関係者、自治体関係者、一般市民等の申し込みにより、発掘調査見学を実施した（5・7・8 月）。なかには大学講義の一環で利用されたものも含まれる。

2 体験発掘

2018-1 稲盛記念館(仮称)新営工事に伴う発掘調査期間中、小学生向けの体験発掘を実施した(8月24日)。市内の小学生10名とその保護者4名がこれに参加した。まず、遺跡から掘り出された遺物を見学してもらい、どのような遺物が遺跡から出てくるのかを解説した後、配布資料を用いて簡単な掘り方を説明し、体験発掘を実施した。全行程は1時間余りであった。体験後は「発掘調査認定証書」を手渡し、終了した。

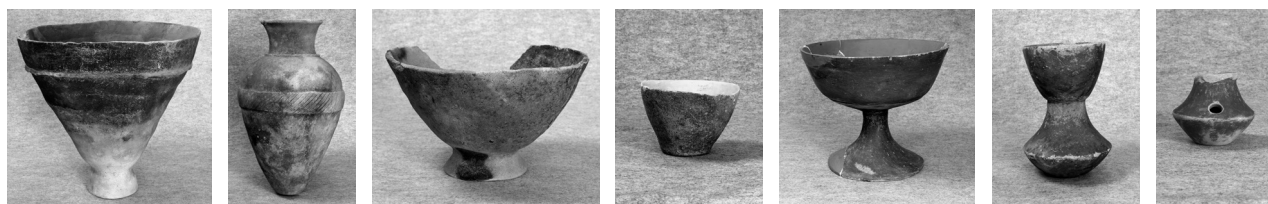
後日、小学生に調査の感想を聞くと、体験時間が短い、との意見が多く、今後の課題とした。



PL.41 体験発掘の様子

3 遺物貸出

国立歴史民俗博物館では平成31年3月開室を目標に、リニューアルが予定されている。そのリニューアルにあたり、総合展示第1展示室(先史・古代)の常設展示品として、鹿児島大学所蔵資料の借用申請があった。それは昭和51(1976)年度理学部2号館増築予定地(釘田第8地点)発掘調査湯都度品である古墳時代成川式土器の器種セット7点(甕・大壺・台付鉢・鉢・高坏・柑・ハソウ)であり、日本列島古墳築造南限域の様相を広く知ってもらうためにも、鹿大構内遺跡を広く認知してもらうためにも良い機会と捉え、これを貸出した。今後も継続貸出予定である。



PL.42 国立歴史民俗博物館への貸出遺物

4 リーフレット

鹿児島大学唐湊団地（唐湊1）学生寄宿舍「唐湊遺跡」および、農学部指宿植物試験場敷地「弥次ヶ湯遺跡」という周知の遺跡を加え、内容をマイナーチェンジしたリーフレット（第3版）を作成、配布している。



PL.43 リーフレット（第3版）裏

5 ホームページ

調査歴、刊行物のアップデートのほか、2018-1 稲盛記念館（仮称）新営工事に伴う発掘調査期間中、その状況をブログで掲載している。

6 センター紹介・新聞記事

広島大学総合博物館において、平成30（2018）年11月7日から12月15日、第13回企画展「大学と埋蔵文化財：キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力」が開催された。企画展では、全国大学埋蔵文化財調査施設22箇所を紹介する全国でも初めての試みであり、その機関のひとつとして、鹿大埋蔵文化財調査センター紹介および在職研究者の紹介がパネル展示された。

宮崎県立西都原考古博物館において、平成31（2019）年1月12日から3月17日、パネル展「地下を語る：日本のGPRはどこまで到達したのか」が開催された。本大学埋蔵文化財調査センターにおいて実施している地中レーダー探査について、その取り組みを紹介した。

2018-1 稲盛記念館（仮称）新営工事に伴う発掘調査期間のうち、古墳時代住居群の発掘調査中、新聞社の取材を受けた。平成30（2018）年7月30日、『南日本新聞』地域総合版に「古墳時代の竪穴住居群出土」という記事が掲載された。



PL.44 パネル展『地下を掘る』



PL.45 南日本新聞（2018年7月30日付）

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 34

2020年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

鹿児島市郡元一丁目 21-24

TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島市南栄2-12-6

TEL 099-268-8211

Kagoshima University

Research Center for Archaeology

Report Vol.34

CONTENS

Chapter

1	Report of archaeological research in fiscal year 2018.....	4
2	Outline of excavation at Area I•J-3•4 in the Korimoto Campus(2018-1)	8
3	Report of text excavation at Area E-7•8 in the Sakuragaoka Campus(2018-3)••	17
4	Report of rescue surveys 2018(2018-A~Q)	19
5	Bowling survey in the Toso Site and Ground-penetrating radar in the Korimoto Campus 2018.....	37
6~9	Report of other jobs.....	41

Published by
Kagoshima University Research Center for Archaeology

2020